
チャンドラ - 中華街の星たち -

hanaco

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

チャンドラ - 中華街の星たち -

【Nコード】

N1976D

【作者名】

hanaco

【あらすじ】

昭和四十年代、中国人、朝鮮人、日本人などがひしめく横浜中華街で生まれ育った僕は、日本人グループのリーダー的存在であった。当時中華街では日本人、中国人、朝鮮人、東南アジア、西洋人などの少年グループが、人種別にプライドと縄張りを守るために抗争を繰り返しており、僕もまた様々な少年たちと喧嘩に明け暮れる日々であった。ある日、そんな中華街に別の地域のグループが挑戦状を叩きつけ、中華街にたむろする少年たちを次々に襲いはじめた。そして、ここから悪ガキストリートギャングたちの抗争が激化し、ハ

ラハラドキドキの物語は大きく展開していく。

プロローグ

ある日、じつと鏡を覗き込んでいた。けして自分の顔に酔いしれていたわけではない。

顔に散りばめられた無数の傷跡が、しわと染みにまぎれて目立たなくなっていることに

感心していたのだ。しかし、よくよく見てみると瞼の上の小さな傷が今でもくつきりと残

っている。昔から右目のほうが少しばかり小さいのはこの傷が勲章の如くのしかかっている

からだ。などと勝手に納得していた。

少年期、青年期にこしらえた喧嘩の傷跡などは身体中にいくらでもあり、消えている傷

もあれば残っている傷もあるのだが、この瞼の傷が今でも不思議な感覚で脳裏に焼きつい

いるのは、この傷が中華街でのバトルの予告であつたからだ。

それは昭和三十年代の後半、小学校一年の時のことだ。

驚づかみにされた両瞼に相手の爪がガツチリと食い込み、この傷はめでたく刻印された

のだ。僕にしてみれば物心がついて初めての喧嘩だった。

相手は二年上で中国系ハーフの二人組み、中華街周辺ではその学年の番長格という肩

書きをしよった問題児であつたのだが、幼稚園の頃から知る彼らとの仲は良好だつたはず

だ。しかし、喧嘩の最中に瞼を先に切られてしまつては、ボクシングと同様に前が見にく

なつて大変不都合である。しかも二年上を二人も相手にしていたら、目に流れ込む血を

拭う度にパンチの雨嵐だ。しかし、最初から勝てると思つて始めた喧嘩じゃないし、とに

かく目の前が見えない。

観念した僕はどうにでもして下さいと言わんばかりに腰をおろし、胡坐をかいて腕を組

むと目を瞑つた。いわゆる破れかぶれ作戦だ。

しかし不思議とそこには涙も流さずにひょうひょうとしている自分がいだ。すると、彼

らは攻撃の手を止めて僕の顔を覗き込み。

「エフ、大丈夫かぁ・・・？」

と、優しさは見せたもののぼつが悪そうに逃げ帰ってしまった。

何が、大丈夫かぁだ。ちっとも大丈夫ではない。

しかし、彼らのその言葉だけで、全てを許していた僕は父親譲りのお人良しである。

帰り道、目の上から滴り落ちてくる血は止まらず、拭っても拭っても目の中に落ちてき

た。そして、関帝廟通りから我が家までの路地になんとかたどり着き、玄関の格子戸を開

けた時には顔中が血だらけであった。

そんな僕を目の当たりにした母は驚愕して膝を床に落としていた。しかし、その傍らで

「喧嘩かぁ、こりゃ、やられた顔だぁ・・・」と、父は手を叩いて笑っていた。

父の言葉を間につけた母は僕の肩を揺すりながら原因の追究をし、相手の名前を聞き出

そうと懸命であった。僕は相手の名前だけは言うのを拒み続け、黙

つたまま俯いていたの

だが、どうやら父は感ずいていたらしい。しかし、僕の黙秘も無駄に終わってしまった。

二人組みは不思議なことに一時間もしないうちに我が家に誤りに来てしまったのだ。

きっと彼らの脳裏に僕の父の顔が過ぎってしまったのだろうが、父はそんな野暮な男で

はない、それどころか二人組みを前にとんでもない事を言った。

「ヤンにロン、案の定、お前さんたちかい、よく謝りにきたな。どう考えたって、お前さ

んたちが相手じゃ、うちのお坊ちゃんじゃ齒が立たねえやな。まあ、たまには気合を入れ

てもらわねえとな、この辺りで生き残っていけねえしな。

けどな、二対一ってえのはただけねえなあ、お前さんたちが年上だろうと一対一のタ

イマン勝負だったらいつでも相手させてやるんだがなあ。どうでい、謝りにきたついでに

もう一勝負するてえのは、すぐでもいいぞ。ヤンかロンか、どっちがやる？ エフ、もう

一度やれ」

父のとてもない言葉に母は気絶寸前にいた。ヤンとロンは俯いたまま硬直しており、

僕は、冗談じゃない、勝手なことを言うな、そんな思いで俯いていた。

思えばその時、心の中に変化が現れたのは確かだ。なんともいえない爽快感と、これだ

け殴られてもしっかりしている自分に自信みないなものがメラメラと沸き上がってきてい

た。そして、先に瞼を切られると目の中に血が流れこみ前が見えなくなる。先にやらなけ

れば喧嘩に勝てる訳がない。と、教訓し、先手必勝を心に誓うのであった。

それ以来二学年上のヤンとロンとの仲はそれまで以上に深まり、兄貴のように慕うよう

になるのだから皮肉なものだ。

そのうちヤンやロンと同年齢のキートンやダイなども僕の味方的存在になり、一緒にい

ることが多くなっていった。しかし、その後、中国系、朝鮮系のグループから狙われるよ

うになっていた。

例えば、人種的な蟠りもあつたろうが、僕がつるんでいたヤン、ロン、キートン、ダイ

という存在は、様々な人種の連中からしてみれば神様のように崇め、のちに中華街を牛耳

切っていく四天王であつたからだろう。彼らにしてみればそんな連中とつるんでいる僕を

許せなかったのは確かだ。彼らは僕が一人でいる時を狙いことごとく襲いはじめた。

そのおかげで今でも背中越しからひくーい声で名前を呼ばれるのが大嫌いである。振り

返りざまの事態がトラウマの如く脳裏を掠めるからだ。

確かにあの頃は振り返つたとたんパンチがとんできた。パンチならまだましである。バ

ット、鉄パイプ、角材などが飛んで来ることもあった。だからか、呼び止められたら直ぐ

に振り返らず、なんでもよいから目敏い武器を探して素早くそこまですり、それを握って

から振り返るようになっていた。さすがに今では当時の呼び名で僕

を呼ぶのは親戚ぐらい

なものだろうから、このような行動を起こすことはないが、あの頃はそれが日常であり涙

で汚れている顔を悟られまいと、家の真裏になる勝手口のドアをそつと開け、半畳ほどの

上がり口右側に設置してある洗面台で顔を洗っていたことも度々あった。

しかし、小学生低学年のその頃には激痛にながしていた涙も、日々悔し涙から復讐の涙

に変わりやがてそれは枯れ果てていった。そして、それを見かねた父の一言から全てが始

まった。

「男はな、やらないやならねえ、時、ってもんがあんだ。お前さんがヤンとロンとやった

時もそうだ。そんなに悔しいならやられることを恐れねえで、一人で男気ってもんをみせ

てこい。行つてこい！」

そう言つて父は玄関に立てかけてあつたバットに向かつて顎を振つた。僕はバットを握

りしめ一人であのグリープの縄張りに殴り込んでいた。

*

*

*

昭和四十年代、世の中は暗から明へと移り変わり、三十年代からの好景気もさながら高

度経済成長の真っ只中にあった。

白黒からカラーに移りつつあったブラウン管の中では、クレイジーキャッツやコント五

十五号などが走り回り、てなもんや三度笠やでんすけ劇場などの舞台演劇が世を賑わせ、

若者たちは髪を伸ばし始めラップズボンで街をかつぽし、ビートルズに狂喜乱舞し、GS

ブームに火がつきはじめていた。

そんな時代の最中、中華街では日本、中国、朝鮮、日中のハーフ、日朝のハーフ、東南

アジアなど異種多様なグループの少年たちが人種別に分かれ、自分たちのプライドを守る

為に連日の如くバトルを繰り広げていた。

その頃、四年生になっていた僕は、乱暴、やんちゃ、無鉄砲と三拍子のレッテルをはら

れるほど遅しく育ち、仲間も多い代わりに敵も増え、幼い頃からの相棒であるケンと共に

日本のグループを強化し、喧嘩になると僅か五人で立ち向かった。

中華街は入口の善隣門から中山路、香港路、市場通り、上海路と四つの十字路からな

り、その十字路を長安道、関帝廟通り、広東道、元町へと続く南門通りが取り囲み、その

他にも様々な名称を持つ通りや路地が枝のように延びている。

その中で当時から一番活気があったのは、ほぼ中部に位置する市場通りであった。現在

この通りは中華料理店が軒を連ね観光客の往来が激しい通りだが、当時は観光客だけでは

なく地元の買い物客で賑わっていたから活気だけは劣っていなかった。今でこそこの通り

も中華街大通りからの延長と化しているが当時は多種多様な業種の店が建ち並び、商店街

なる賑わいを見せていたのである。

そんな通りや路地がそれぞれのグループの縄張りとなり、それは通りごとにきつちりと

分かれていた。その中には暗黙の了解的なフリーゾーンと三つの危険ゾーンが存在した。

フリーゾーンは主に香港路、上海路、関帝廟通り、広東道、南門通りや様々な路地を示

し、東南アジア系の縄張りである長安道などもこの部類に属していた。このフリーゾーン

は主に年上の連中やハーフのグループが支配していたため僕たちにとっては比較的安全で

あったのだが、中国系グループが縄張りとする中華学校を拠点とした中山道、朝鮮系グル

ープが縄張りとする市場通りの延長になる朝鮮マーケット通り、そして、日本のグループ

が縄張りとする市場通り、この三本の通りが危険ゾーンで文字通りこの三グループの抗争

が一番激しかった。

そんなグループの中でも日中のハーフ、日朝のハーフ、東南アジ

ア系などは日本の小学

校に通っている連中も多く僕たちとの関係も比較的良好であった。
その中に朝鮮系ハーフ

のリョウという少年がいた。学校やこの周辺で右に出る者なしと言
われたほどの強者であ

ったのだが、群れを嫌いどこのグループにも属さず牙を向いた一匹
狼的存在であつたのだ

が、僕とは馬があい年上と絡んだ時には力を貸してくれ、僕たちの
グループの影の親分と

もいえる存在であつた。

こんな連中がうじょうじょいるのである。一人の時は要注意だ。
とくに路地裏を歩く時

は、後ろを振り返りながらあるくべし、神経を研ぎ澄ませながら歩
くべし、これは鉄則で

あつた。この掟を自分で破った時には「ガッツーン!」と、後頭部
に衝撃が走る。僕はた

まらず頭を抱え込んで両膝を地面に落とし「こ、こ、このやろー」
なんてふらつきながら

振り返ってもそこにはレンガを投げ捨てながら「ざまあみろ!」な
どと可愛いことを言っ

てうれしそうに舌を出して逃げていく連中の姿が霞んで見えるだけである。それでも追い

かけようとすれば頭に激痛が走り、首筋に汗のようなものがツと流れ、そのうち背中が

生暖くなりそれが冷たく感じたところにはシャツの背は血だらけであつた。

そして、時には路地の影から目の前に角材が振り下ろされた。『残念でした、ばあか』

と、角材を握りしめている相手の股間を蹴り上げ、尻餅をついている相手の顔面にもう一

発蹴りをお見舞いしようと足を上げた瞬間、相手は握っていた角材を僕の可愛い足に向か

って下から振り回し、角材はみごとに僕の足に命中した。

いつもであれば角材が当たった感触などアドレナリンが消してくれるのだが、明らかに

当たった感触よりも刺さった違和感を覚えた時には激痛が脳天まで走り抜けた。まさか角

材の先に五寸釘が打ち込んであるとは思っていないではないか、しかし、上げた足をその

ままにしておくのはもったいない。僕は相手の顔を蹴りおろし靴のつま先を相手の口の中

につっこみながら反省をするのだ。

しかし、そう度々頭をレンガや鉄パイプで殴られていては悪い頭がますます悪くなる。

時には突然の奇襲に対して逃げるのも仲間を集めるための作戦の一つであった。路地から

路地をにげまくり「アーアー！」と、大げさに声をあげて市場通りを走り抜ければそ

のうち必ず路地の影から正義の味方が現れるのだ。それが相棒のケンや三ばかトリオであ

った。

十mほど先には鉄パイプと黒いバットを這わせながら、ケンが、八つ墓村のあたりじゃ、

の如く走ってくる。しかも黒いバットは僕の愛用のもので、わざわざ我が家の戦闘基地ま

で行って持ってきてくれるのだ。

「ケン君、いやケン様よくぞ現れてくれた！」

僕は即座にバットを受け取りニヤリと振り返り、逃げていく彼ら

を追いかけまわし愛用

のバットでぶったたいてやるのである。するとそのうち「ガリガリガリ！」と鉄パイプ

を引きずる音が響いてくる。それが三ばかりオを中心とした僕の仲間たちであった。

この音は僕たち日本のグループが殴りこみにいく際に威嚇のために鳴らす音であったの

だが、相手はこの音が聞こえたたん逃げてしまっし、これからいきますよおってわざわざ

ざ知らせに歩いているようなものである。しかし、当時の僕たちはそれが自分たちの存在

を示すための絶好の手段だと思い込んでいたのだ。

彼らも僕たちも中華街の路地を知り尽くしていた。彼らが逃げれば僕たちが追い、僕た

ちが逃げれば彼らが追いかけてくる。時には僕たちの溜まり場である台南小道の路地裏や

家の玄関にまで爆竹を投げ込んでくる始末である。そうなると迷路の如き路地は戦場と化

し抗争はエスカレートしていくばかりであった。しかし、この抗争は外だけのことではな

く家にいる時でも油断がなかったのだ。

我が家の近所は中国系の家族が多く、家の佇まいも洋風的な家がほとんどであった。だ

から我が家の内装は当時の日本家屋と比べると変わっていて、一、二階の部屋のほとん

どが板張りで、寢床にしていた二階の六畳間が唯一の畳部屋であった。その部屋と並んで

洋服職人の仕事部屋があり常時四、五人働いていたため、一階の台所兼用の部屋が食堂の

役割をしていた。そして、一階の半分近くが事務所になっていて、ローテーブルを挟んで

二人掛けと一人掛けのソファがあった。一人掛けのソファは僕のお気にいりの指定席

になっていて、時には戦闘基地として重要な役割を果たしていたのだ。

僕が家でおとなしくしている時は、このソファを玄関に向けて腰をおろし、右目でテ

レビを見ながら左目で玄関を監視していた。監視といっても泥棒を捕まえて退治してやる

うなどと意気込んでいるわけではない、僕にしてみれば泥棒よりも数倍厄介で鼻の穴を悶

牛の如く膨らませた様々な人種のグループがやってくるからだ。

その中でもテイ、コンジン率いる中国系のグループやキム、ヨンホウ率いる朝鮮系のグ

ループは頻繁にいらしてくれるのだ。たいへん気が荒く怖いお坊ちやん方である。彼らは

僕が家にいると匂いを嗅ぎつけては玄関の向こう側で待ち構えていた。俗にいう殴り込み

である。幸い、彼らは家の中の様子を伺っているだけだ。僕の仲間なんぞは入るなと言っ

ても勝手に上がりこんでくるし、我が家を避難所と間違っている少年たちが血相を変え

て逃げ込んでくるような家なのだ。僕としては遠慮しないで堂々と入ってくればいいと思

うのだが、彼らが我が家の境界線を越えられないのには理由があった。

僕のお気に入りのソファは殴り込みに来た連中を追っ払うために大活躍をするから

だ。ソファの下、二十cmほどの空間には今まで集めた様々なア

アイテムが、早く使って

くれとばかりに転がっている。スパナ、ドライバー、トンカチ、クギヌキ、バット、鉄パ

イプ、パチンコ、銀玉鉄砲、そしてかんしゃく玉に爆竹。これらは護身用のアイテムだ。

心優しい僕にしてみればこんな野蛮な道具は使いたくないのだが、めんどくさくなると

玄関の戸をいつきに全開にしてソファへ戻り、座ったまま飛び道具の雨嵐だ。そしてパ

チンコを取り出し火薬の入ったかんしゃく玉を近所の塀に打ち付けて威嚇攻撃をし、時に

は直接お見舞いしてやる。それでも帰っていただけない場合は、中国の爆竹に火をつけて

外へほつぽり投げてやるのだ。すると怖いお坊ちゃん方は姿を消してくれるのだが、気が

すまないお坊ちゃん方が多く、迷惑なことにまた戻ってくるのだ。すると手には角材や鉄

パイプやレンガなどを握り、中国の太鼓のバチを振り回し、僕の可愛い顔にぶつけるつも

りでいるのか、鉄の如く磨き上げた土だんごを握っているお坊ちゃ

んもいる始末である。

しかも最後には「エフ、出てこーい！」などと身震いするほど恐ろしいことを言う。僕

としてみれば常時十人以上はいる連中の前に好きこのんで出て行けるわけではないではない

か、できることなら明日に延ばしてくればありがたいのだが、気の短い彼らは待つてく

れない、その時代に携帯があろうはずもなく仲間を即座に集めるわけにもいかない。僕は

観念して外へ飛び出しお坊ちゃん方をぶっ叩いてやるのだが、彼らが我が家の境界線を越

えられないのにはもう一つ理由があった。

当時、中華街周辺で様々な事業をしていた父は、別にも事務所を構えていたため我が家

の事務所は事務的な機能はしておらず、父の仕事に関わる人たちの憩いの談話室のような

状態で、やたらと人の出入りの激しい家であった。それこそ僕がいない時に家の前をうる

ついていたりと、鬼瓦のような顔をした気の荒いトラックの運ちゃんや、港の船舶関

係の男たちと混じって社長などと呼ばれている父までもが、怖いお坊ちゃん方をむりやり

事務所の中にひっぱりこんで、暇つぶしと酒のおつまみがわりの餌食として可愛がってし

まうことがあるのだ。しかも、父などは一風変わり者で、生まれは浅草の江戸っ子で江戸

弁と浜弁が交じり合った言葉を使い、声がでかい。しかも大正生まれにしては背が高く肩

幅が広く、シャツの襟を背広の上に出し、ハンティング帽に薄色の度つきサングラスを掛

け、足底を地面にこすりつけながら偉そうに歩く、父と街中を歩いていると怖そうなチン

ピラのお兄さん方が寄ってくる。というか父が寄っていくのだ。そしてすれ違いざま「ば

っかやろう！ 金持って来い！」と、とんでもない挨拶をする。その光景たるやどちらが

それ者なのか判らなくなる。だからかしばしヤクザ者と勘違いされることと、指の先が一

部欠如していたことと何か関係があるのだろうか、僕は父を不思議な思いで見上げてい

た。しかしそんな父も子供を見ると目が輝き、からかってばかりいて元来ののんき者のお

人好しは隠せずにいた。

そんな男どもが頻繁に出入りしている家である。殴り込みに来た怖いお坊ちゃん方は狂

犬の如く家の前をうろつき僕の出方をじっと伺っているのだ。

それでも彼らが度々やってこれたのは僕の母の存在が柔らかかったからだろう。母は人

種差別的思想を嫌い誰にでも公平に接し、誰でも家に入れてくれる。家にやってきた連中

が鉄パイプや角材を握ってしようが、レンガを担いでしようが母の目から見たら僕の遊び

仲間程度の意識しかなかったようで、まさかこの少年たちが自分の息子に敵意を持ってや

ってきているとは思ってもいなかったのだろうが、その頃になってやっと気づいたのだ。

まったくをもって非常識な父に比べ常識や思想も正反対な人である。大きなお世話かも

しれないが、その頃の僕にはヤクザな父とお嬢さん育ちの母が何故

一緒にいるのか不思議

であった。僕の推測ではお見合い結婚だったらしいから、父の言葉巧みな話術にまんまと

騙されたにちかない。

そんな母の日常は職人たちの食事の用意をし、事務所に出入りする仕事関係の人たちの

相手をし、犬や十匹以上いた猫の世話をしたりと忙しく動きまわっていた。しかし女性に

は珍しく理数系にめっぽう強い人で、若い頃には学校の先生を志していたほどのインテリ

だったらしいのだが、青春期の混乱の最中夢を実現することはできなかったようである。

そんな母の気持ちとしては僕を勉強のできる文学青年的な方向に育てたかったようで、

忙しい合間をみでは僕の通う小学校に顔を出し、PTAの役員、親睦会、運動会、遠足と

ありとあらゆる行事に参加し、毎日のように僕に勉強の基礎を教えこもうとしていたが、

教えれば教えるほど母の悩みは大きくなり期待はことごとく裏切られていった。

僕は仲間たちとの遊びと喧嘩に明け暮れ、それは年々エスカレートするばかりであつ

た。そんな僕をみるたびにお嬢さん育ちの母は悩み、ため息をつき、父を恨む日々を送つ

ていたのだ。何処をどう間違つたのか、母の影響を素直に受けていれば文学青年も夢では

なかったのだが、どうやら一人っ子の僕は母よりも父とこの中華街の影響をどっぷりと受

けて育ってしまったようである。

．．．．．プロローグ 完．．．．．

第一章 ケンと三ばかりオ

「ケンと三ばかりオ」

穏やかな日差しが教室の窓側に優しく降り注いでいた。

どうやら中央部の窓が微かに開いているらしく、束ねられたクリム色のカーテンが緩

やかに揺れている。そんな穏やか光景を授業には耳もくれずになんとなく眺めていた。

退屈である……

この退屈さの根源は山手の仙人山を縄張りとする西洋人のグループが、中華街狩りを決

行した頃から始まった。

中国系、朝鮮系、東南アジア系、それぞれのハーフ系のグループが次々に襲われて、次

は日本人のグループかとわくわくして待つてはいるのだが、今のところその気配はなく、

それどころか仙人山に襲われたコンジンやヨンホウのグループまでもが僕たちの前に姿を

現さなくなってしまった。

コンジンやヨンホウがやられたままでいる訳がなく、報復の作戦に忙しくて僕たちなど

相手にしている暇はないといったところだろうが、まったくをもつて静かである。そのお

かげで僕の周りには勉強以外の問題が何も起こらず、相変わらず穏やかでのんびりとした

日々が続いていたのだ。しかし、中華街に住んでいる僕の場合、穏やかな日々というのは

授業の退屈さを上回るほど退屈で身体によろしくないのだ。

今日は土曜日で授業は午前中で終わりだ。有難いことに次のチャームが鳴れば帰れる

し、明日は待ちに待った日曜日だ。誰もが一番わくわくする時間帯なのだが、出るのはあ

くびばかりである。

と、その時、たいへんな事を思い出してしまった。僕はあくびをしながらにやりとし

た。土曜の午後とくれば、一時からでんすけ劇場がテレビで放映される。今日の帰りは道

草をくつてる暇はなくなってしまった。もたもたしてるとでんすけ劇場が終わってしま

う。大変だ。早く帰らねば。

放課後、相棒のケンが「でんすけ、でんすけ」と、呟きながら僕のクラスにやってき

た。どうやらケンも僕と同じことを考えていたようだ。同類である。

しかし、やっかいな事が一つあった。ケンもその事は気になっていたようで僕の前に来

るなり頭を掻きながら言った。

「エフよお、今日でんすけじゃ、すっかり忘れてたよ。けどよお、あのばかたちどうす

る?・・・」

僕は即座に答えた。

「あんなばかたち構ってる暇ねじゃ、しかとじゃ、しかと」

「それもそうだな、あのばかたちと帰るとろくなことねえからな、しかとしてとんづらす

るかあ」

「その通り、ケンちゃんいいこと言っじゃ、とんづら、とんづら・・・」

・・」

僕とケンはある連中との約束を聞かなかったことで同意し、逃げるように学校を後にした。

た。

ケンとは家の前で別れ、早々に昼食をすませた後は、事務所のソファーに座ってテレビ

にかぶりつき、でんすけのトレードマークであるはげ頭、口の回りを黒く塗ったすつとぼ

けた顔、腰にかけたタオルに全神経を集中してばか笑いをしていた。すると、二階から職人のささちゃんが降りてきた。

「なあんだ、でんすけ、もう始まってたのかあ・・・」

そう言いながら、ささちゃんはテーブル越しのソファーに腰をおろしタバコに火をつけ

た。

しばらくすると玄関の格子戸にちらつく人影が気になり始めた。目をやると曇りガラス

に怪しげな姿が三つ張り付いたり離れたたり、時には姿を消したりを繰り返していた。

ちえっ！　と僕が舌打ちをすると、ささちゃんが反応した。

「エフ坊、どうかしたのかい？」

ささちゃんは中腰になると玄関先を覗きこんだ。

「あららららら・・・最近、静かだと思ったら、やっと来たねえ、これは興味ぶかい

ぞ！」

ささちゃんにはにこにこしながらソファーに腰を下ろした。

どうやら久しぶりの殴り込みらしい、僕は戦闘基地と化してるソファーの下に手を伸ば

してまさぐり、指先に触れたバットを引っ張りだして握っていた。
この瞬間、退屈病は吹

き飛び身体中の血が逆流し始めた。

「また始まるのかい、今日はどうするんだい？　楽しみだねえ・・・

」

ささちゃんは立ち上がるとまた玄関先を覗きこんだ。

「今日は二、三人しかいなそうだねえ、早く行かないといなくなっちゃうよ」

「いいんだよほつとけば、俺はでんすけ見てんだから」

「それじゃ、何でバットを握ってるんだよ。早く行きなよお」

「うるせえんだよお……」

ささちゃんの気持ちも判らないではないが、今はそれどころではないのだ。でんすけを

最優先しなければ早く帰ってきた意味がなくなるではないか、一週間ぶりの楽しみをあん

な連中に壊されたくない。視線をすぐにテレビへ戻した。

「エフウウ~~~~エフウウ~~~~」

しばらくすると、今度は僕の可愛い名前を勝手に呼びはじめた。どうやら今日は声色作

戦のようである。仲間を装っておびき出そうという気だ。そんな子供だましの乗る僕では

ない。いつものことだが間抜けでしつこいやつらである。しかし、でんすけ劇場がクライ

マックスを迎えている。僕は周りのいっさいを断ち切り努めてしかとを決め込んでいた。

すると、玄関の引き戸が音もなくスーッと十cmほど動いた。僕の左目はその瞬間をと

らえていた。どうやら声色作戦は失敗したと思ったのか、開けられた戸の隙間にむりやり

頭を突っ込んでいるばかりがいた。

「まったく、しつこいやつらだな、ぶっ叩いてやる」

そう呟きながら僕はバットを握るとソファーから立ち上がった。

「そうそう、そうこなくちゃ！」

背中からささちゃんの声援を受けながら裸足のまま玄関におりて、戸の隙間から出てい

る黒くてでかい頭めがけてバットを振り上げたたん、によきつと顔を上げたのはコンジ

ンでもヨンホウでもなくコングであつた。コングはバットを見上げると不思議そうな顔を

して言った。

「まったくよお、いねえのかと思つたらいんじゃないかよお、何で先に帰っちゃうのよお、

なんだよそのバット？ まさか俺を殴るきい、これ以上殴られたら死んじゃうじゃ・・・」

コングの第一声にはいつもの威勢のよさは感じられず、顔は薄汚

れて所々が血がにじん

でいた。

「なあんだよ、コンジンかと思ったらコングかあ・・・凄い顔して
ますけど、どうかしま

したか？」

コングの血にまみれた顔など見慣れているのだが、どうもいつも
と様子が違う。普段で

あれば入るなと言っても黙って家の中に飛び込んで来るコングなの
だが、今日に限っては

遠慮ぎみである。しかも、先ほどから格子戸に見え隠れしていた二
人も動かないままだ。

コングがいる以上残りの二人はバッハとパンチョであろう。どうや
ら、穏やかな日々も今

日までのようだ。

「どうしたんだよお、まったくよお・・・」

玄関におりて引き戸を全開にした。目の前にはまさしく服が泥だ
らけでよれよれのコン

グ、バッハ、パンチョの姿があった。

「すみませんけどお、うちは病院じゃないので・・・さようなら・・・」

僕は戸を閉めると何事もなかったようにソファーに戻っていった。

「うわっ！」テレビの画面にはしゃばん玉石鱈のコマーシャルが流れていた。でんすけは

既に終わっていた。

「エフ坊、残念だけど殴り込みではないみたいだね、誰がいるの？」

「あのばかたちだったよ、まったくよお、あのばかたちのお陰でんすけが終わっちまったよ」

「たよ」

既に三ばかりは玄関の中に立っていた。

「だいたいお前らは何で玄関の前でうろうろしてんだよ。このばあか！」

そう怒鳴りながら三人の顔を次々に睨みつけてやった。

「そんなこと言っただって、汚ねえママ家に上がると、エフのお母ちゃんかやんが怒んじやんかよ」

「お」

コングは僕の母に気でも使っているのか、心にもないことを言う

と頭を垂れた。

「あららら、喧嘩かい？　こりゃあ話の内容によってはライスチヨコ三個、いや、五個

になりそうだねえ」

「えっ、本当？・・・」と三ばか口を揃えて言うと笑顔になった。

だが、どうもいつもと様子が違う、気合が入りすぎである。確かにだばだばのスポンを

腰ではき、ぺったんこのランドセルを肩に掛けている姿はいつもと変わらないのだが、傷

だらけの顔に血を擦った跡がこびりつき、乾かない血は今だに滲んで光っているのだ。そ

れでも笑っている僕を照れくさそう見ながらはにかんでいるのは、喧嘩慣れした彼らの凄

いところで、その姿からして上級の格闘のあとだということは今までの経験上すぐに理解

できる。しかも、彼らが真っ先に僕の家に来た理由も想像がついていた。

彼らは幼少の頃から僕とつるんでいて、今まで様々な人種のグループと戦ってきた幼な

じみだ。いわば子分のような存在であろつ。

歳は一つ下なのだがこの三人は身体がでかい、角刈りのパンチヨとくせ毛でくるくる頭

のバツハは僕やケンとひけをとらないし、コングなどは小太りのうえ僕らよりでかいの

だ。この三ばかりは絶対にどこかでダブっているのではないかと疑いたくなるほどだ。そんな

な彼らは氣にくわない相手がいると、それが年上であろうと容赦しないのだ。だから彼ら

が手を組むと年上でも手が出せなくなり、今まで何人も年上が犠牲になっている。その

たびに僕やケンが話しをつけて仲を取り持って来たことを思うと涙が出るのだが、僕には

周辺の同学年の連中よりも頼りになる面白い三ばかりオなのだ。

「エフちゃちゃん、どうしたの？」

奥の台所から母の声が飛んできた。僕は三ばかりを気にしながら怒鳴り返した。

「お母ちゃん。こいつらの前でエフちゃちゃんって呼ぶなっていったる！」

母は誰の前でも何処でも僕をちゃん付けで呼ぶ。近頃それが照れくさく感じるようにな

っていた。

「いいじゃないのお別に・・・そんなことよりどうかしたの？ エフちゃん」

と、言いながら僕の気持ちなど理解しない母が、前が前掛けで手を拭きながら近づいて

きた。

「だからあ、エフちゃんって・・・まあいいや、お母ちゃんちょっとこいつら見てみい」

僕は笑いながら手招きした。しかし、彼らを目の当たりにした母は意外と冷静でそれほ

ど驚いた様子はなく、血だらけの彼らを見て驚愕する母を想像していた僕にしてみれば期

待はずれそのものであった。

「あなたたちまた喧嘩したの？ そんなところにつっ立ってないで中に入りなさい」

と、母は彼らの顔を見て言ったが、服装に目をやりながら。

「ち、ちよっとそのまま待つてなさい。いいまだ上がらないでよ・・・

・・・」

そついい残して小走りで台所へ戻って行った。

三ばかりは肩からランドセルを降ろすとほっとした表情でぼーっとたたずんでいた。

僕はそんな彼らの哀れな姿をソファーに座ったままにたにたしながら眺めていた。

「なあんだ、また、治療しに來ただけか、近いうちに喧嘩の話し聞かせてね・・・」

ささちゃん三ばかりに向かって手を上げると残念そうに仕事場へ戻って行った。

母はいつものように濡れタオルを三本と救急箱をかかえて戻って来るなり、彼らの顔か

ら腕、そして足にいたるまでを無言のまま拭き始めた。そして彼らを事務所にあげるなり

「ここに並びなさい」と指示して救急箱の中から消毒の粉と赤ちゃんを取り出して傷口に赤

ちんを塗り始め、傷が酷い部分には消毒粉を吹きかけた。

その度に三ばかりは「痛つてえ、しみるう、かんべんしてくれえ」と叫びながらも嬉しそ

うであつた。

母の手当ては手馴れたものだ。僕は一人っ子だったのだが、仲間だけは太勢いた。不思議

議と僕の周りに集まつてきた。けして仲間をつくる才があつたわけではないだろうが面倒

見だけはよかつたらしい。仲間が怪我をすると必ず家へ連れていき母に手当てをさせてい

た。かすり傷程度ならいいが酷い状態で母の手にはおえず、そのまま病院へ直行すること

も度々あつた。しかも仲間の耳くそが溜まつてゐるから取ってくれと連れてきたこともあつ

た。その度に母は目を丸くしていたのだが、慣れるということは恐ろしいことだ。傷口も

まともに見れなかつた母が最近では状況判断も素早く、手馴れた看護師の如く変身してい

た。これも全て僕のお陰である。

母は手当てを済ませると、フーツとため息をついて三ばかりを見渡しながと言つた。

「三人ともけつこつやられちゃったみたいね、どう、まだ痛い？」

母は三人の目を順番に覗きこんだ。それが照れくさかったのか。

「痛かねえよ、ちきしょう、あいつら覚えておけよお！」

この三人の中でも一番気の強いバツハがテンパーを振り乱しながら強がって見せた。

「だいたいよお、お前えら誰とやってきたんだあ、ヨンホウたちかあ、それともコンジン

たちかあ」

そう言つて僕が三ばかりを見渡すと、母が振り返つて言った。

「そんなことどうでもいいでしょ、あなたは余計なこと聞かないの」

「どつちでもねえよ」

「あいつらは最近、俺たちの前に姿見せねえし・・・」

コングとパンチョがそう言つて僕の顔を恨めしそうに見ると、バツハが意味ありげに赤

く充血した片目でじろりと目線を送ってきた。その瞬間、僕の脳裏は仙人山のグループを

捕らえていた。

「お前ら仙人山へ行つたのか?・・・」

「きまってるじゃ」

バツハが力強く答えた。

「そうなのか？」と、コングとパンチヨに確認すると、二人は黙って頷いた。

「あいつら、とうとう来たかあ・・・だから、俺とケンがいない時は仙人山は通るなって

言ってたろ、今はとくに危ねえから、そのうち狩られるって言ったじゃねえか」

「そんなこと言ってたって、今日の朝エフに言ったじゃんかよお、今日は土曜だから一緒に

帰ろうって」

「そうだよ、エフだって返事したじゃ、それによお、俺たちはあんなやつらに狩られやし

ねえよ、今日だって負けて逃げてきたわけじゃねえし」

確かにコングとパンチヨの言う通りである。僕はしっかりと約束をしていた。しかしで

んすけ劇場の誘惑に負けて何が悪い。どう考えたってこんな時にこんな喧嘩早い連中とい

るよりでんすけの方が面白いに決まっているのだ。

「そんな返事したつけえ、え、え、え」

おもいつきりすつとぼけてやった。

「したじゃ、だからエフの教室に行ったらいねえじゃ、だからしょうがねえから・・・そ

したらのんきにでんすけ見てんじゃ・・・」

コングの演説はだんだん尻つぼみになっていった。僕はすかさず話を切り替えようと喧

嘩になった経緯を彼らに振った。すると単細胞のコングがボソボソと話し始めた。

「エフもケンもいねえし、しょうがねえから三人で仙人山歩いてたらさあ、外人ハウスの

庭の奥から俺たちと同じ歳の連中が三人現れて、俺たちに向かって卑怯もの、卑怯ものっ

て訳わかんねえこと言いやがったから、俺たちも負けずに言い返していたんだけど、バツ

八が走りだして一人に飛び掛って行ったから、俺とパンチヨも残りの二人をランドセルで

ぶったたいて、ぶん殴って引きずり倒してさあ・・・」

彼らはちょっとしたことでも大げさに驚く母の反応を楽しむように話している。バツハが

母の顔を見ながら得意げで続けた。

「そしたらよお、あいつらも抵抗してきたからばこばこしてやったよお！」

パンチヨも鼻をすすりながら胸を張って言った。

「俺なんかさあ、笛で頭をひっぱだいてやったよ」

まったく恐ろしい連中である。どうやら一緒に帰らなかったのは正解であった。

「そんでよお、何が卑怯ものだって聞いたらさあ……」

そう言つてバツハがにやりと僕を見ながら黙りこんだ。すると、今までふんふんと穏や

かに話を聞いていた母の顔色がみるみるうちに変わりだしてしまつた。

「あなたたち、ぶん殴つて引きずりたおしてばこばこつてどういふことなの？ 笛やラン

ドセルは人を殴る道具じゃないのよ、どうしてそんな恐ろしいことばかりするの、だめで

しょー！」

「そんなこと言ったって、エフなんかもつと怖えことすんじゃ！」

「ばあか、余計なこと言うんじゃねえよ！」

僕はまずいばかりに、ソファーから飛びあがると、コングの頭をおもいつきりはたい

た。

母は大きいため息をついたあと「何が卑怯者なの？」と、三人の顔をゆつくりと覗きこ

んだ。三ばかりは気まずそうに合図のような目線を僕に送った。彼らにしてみれば母にその

理由を話す前に、僕に気づいてもらいたかったのだろう。僕が気づけば話をごまかすこ

とができると気を使ってくれたのだ。だが、そんなことは気にもとめずに彼らに追い討ち

をかけてしまった。

「黙ってねえで、何が卑怯者なのかさっさか言えよ。このばあか！」

すると、パンチョが鼻の穴をピクピクさせながら「エフウーほん」と言っているのかよ

お」と、下目使いでズルズルズルつと鼻水を飲み込みやがった。

「汚ったねえなあ、いいにきまってんじゃ、早く言えよ」

そんなものを見せられてはそう答えるしかなかった。

「ずいぶん前のことで、俺たちはそこにいなかったから、よくわかんないけど・・・」

コングはモジモジしながらそこまで言うときりこんだ。すると、バツハが母の目を気に

しながら呟くように言った。

「そんな時にさあ、雪の中にでかい石を入れて・・・ぶつけたとか何とか、言ってたっ

け・・・」

「雪い？ 石い？ 何じゃそれ？」

僕はすつとんきょうな声を出しながらもしつかりと思い出していた。

「雪の中に石を入れてぶつけたって、誰がそんなことしたの？」

母の叫びにも似た声につられてバツハがとんでもないことを言っていた。

「エフが・・・」

「エフちゃんがやったの？」

母は面食らってバツハの肩を揺すった。

「あ、いや、ケンだっけ？」

と、バツハはとぼけたが後のまつりだった。母は顔だけを僕に向け心外なことを言う

た。

「やっぱり、あなたが絡んでいたのね」

「ちがう、ちがう、俺がやったんじゃないよ」

僕はそう言いながらあわてて手の平を左右に振ったが、母は疑い深そうなまなざしを僕

に向けたまま「じゃあ、誰がやったの？ 言いなさい！」と叫んだ。当然、正直に答える

僕ではない。知らないやつがやったと言い張ったが、母のしつこい追及に交換条件をだす

べく、この話しはライスチョコ五個分に相当する。と、口まで出かったがその気持ちを

ぐっと抑えながら話しを始めた。

何ヶ月も前にさかのぼるが、横浜には珍しく雪が降り積もった日があった。

その雪は夜半から明け方まで降り続いたのだが、翌日の下校時になると空はすっかり晴

れわたり、どうも期待にはそえない雪であった。

しかし、雪合戦ができる程度の雪は残っていたこともあり、僕は同学年の仲間たち数人

と、晴れわたった空を残念な気持ちで見つめながら校門をあとにした。

その日は校門の目の前に口を開けている代官坂トンネルは抜けずに、右側の坂道を山手

通りに向かって登り始めた。

山手通りを渡って代官坂を下り、クリフサイド側になるトンネル出口付近上の広場にさ

しかかろうとしていたその時、広場の奥から雪玉が数個飛んできて僕たちの足元でバサ

ツバサツと砕け散った。

んっ？・・・僕たちは一斉に雪が飛んできた岐路場の奥に目をやった。どうやら広場の

奥でアメリカンスクールの中が雪合戦をしているようであった。

しかし、僕たちに飛んできた雪玉は単なる流れ玉ではなく、その中に混じっていた仙人

山のグループの二、三人が僕たちに向かって投げていたようであった。

「ちつきしょう・・・エフ、ブスカじゃねえか、やっちゃまつか？」

ケンが声を荒げた。

「あつたりめえじゃ、やっちゃまおうぜ」

僕たちは積もっている雪をつかむと、固めながら彼らに近づき一気に投げつけた。その

うちお互いの人数も増えだし、攻防戦はエスカレートしていった。

しかし、不思議なことに気づいた。いつもであればごく一部の仙人山の連中と喧嘩にな

っているはずなのに、この日ばかりは珍しい雪に興奮していたのか、お互いが雪合戦に集

中し純粹に楽しんでいるようであった。しかし、それもここまでであった。

「エフ!・・・」と、呼ぶ声に僕は振り返った。そこに立っていた

のは一学年上のリヨウ

たちであつた。

「エフ、面白そうなことやってんじゃ、俺たちもやってやるよ」

「いえ、結構です」とも言えず、むりやりリヨウたちも参戦するこ
とになった。

僕の脳裏には、安心感と嫌な予感が複雑に絡み合っていた。そし
て、五分もたたないう

ちにそれは起こった。

「エフ、お前えこれ入れてんのか？」

リヨウは手の平に乗っている二c m大の石を見せつけた。

そんな恐ろしいもの僕が入れるわけないじゃないですか、と言
い
たかったが「入れてね

えよ」と言葉を止め握った雪を眺めていた。するとリヨウは傷つく
ことを平気で言った。

「何で入れねえんだよ、いつもだったらレンガでも入れかねないお
前が珍しいじゃ」

確かにリヨウの言う通りである。頭にくると握った雪の中にでか
い石を入れてぶつけて

やることぐらい当たり前のことなのだが、どうもこの日は相手に対する感情が違っていた

ようだ。しかし、リヨウにそんなあまちゃんなことは言えない。

「あいつらも入れてこねえからなあ」と、呟くように言った。

「ばあか、お前えらしくもないこと言ってんじゃねえよ。やられる前にやんだよ、めんど

くせえからよお、これでとどめ刺してやろうぜ」

リヨウはそう言っ、石の入った雪玉を投げ続けた。しかし、妙なことを感じた。

リヨウは一人だけに集中攻撃をしているように見えた。そのうちリヨウが狙っていた少

年は首を押さえながら崩れ落ちていった。

「やっと、命中しやがった、ざまあみろ。エフ、逃げんぞ!」

リヨウはにやつと笑うと、一目散に走り出した。僕にはその時のリヨウの行動がよく理

解できなかった。どうして僕たちよりも二、三歳下であろうおとなしそうな少年を狙った

のであるつか、どうであれこのような場合は一緒にとんずらするに限る。僕たちもあわて

てその広場から逃げ出し、代官坂を滑るように逃げ降りていった。

母に話した内容は実際とは違っていた。あくまで主犯格で知名度の高いリヨウの名前を

出すことは、母の精神衛生上好ましくないし、小言が長くなる可能性があるため知らない

やつで通しておいた。とにかくこの場をしのぐにはこれが万全の策だと考えたのだ。

話し終わるのを見計らって母が言った。

「どうして、あなたたちは外人の子供たちを目の仇にするの？ 少しは仲良くできないの？」

の？」

「できねえよ。あいつら生意気だから・・・」

そう言っただけで足元の傷を撫でながらジロっと母を見た。

「・・・。。。。。。それでちゃんと謝ったの？」

僕は聞こえないふりをしていた。都合が悪いときはこれに限る。

「まさか、謝らないで逃げて来たんじゃないでしょうね？」

母は硬直した顔で僕を見ている。聞こえないふり作戦は失敗のようだ。しょうがないの

でとくいげに答えておいた。

「そんなの、あつたりめえじゃ！」

「な、なにがあたりまえなお、謝るのがあたりまえでしょ。だいたいあなたたちは毎日

なにをしているのお、そんなことばかりしていないで、少しは勉強もしなさい！ ああ恐

ろしい・・・」

母は僕の頭につき三ばかりの頭もはたいた。だが、パンチョが鼻くそをほじりながら懲り

ずに言い返した。

「そんなこと言ったって、恐ろしかったのは俺たちじゃ、そのあとにさあ・・・」

「そのあとって、まだ何かあるのお？」

母は嫌そうな顔をしてパンチョを見つめた。

「実はさあ・・・そのあとさあ、エフと同じ歳のサンダーバードが

三人来やがつてさあ、

今度はそいつと喧嘩になつてさあ、そのうち人数がどんどん増えてきたから、さすがの俺

たちもやべえと思つて、逃げてきたんだけど。おばちゃんさあ、俺たちもいろいろと大変

なんだよ」

・・・・・・・・・・・・・・・・母、目を丸くして沈黙。

あとから現れた連中の察しはついていたが、念のため三ばかりに問いかけてみた。

「あとから現れた三人ってどんなやつだあ？」

コングが判りきっていること聞くな、そんな顔で答えた。

「やっぱりな、ってことはブースカもいたってことだよなあ・・・・」

「

ブースカとトップジョージヨは当時人気のあつた子供向け番組のキャラクターである。ト

ップジョージヨはねづみで、ブースカは間抜けな弱い怪獣だ。なかなか可愛いキャラクター

なのだが、仙人山の二人は可愛くない。どっちにしてもこの二人も中華街狩りに参加して

いたに違いないのだ。僕は少しの間、仙人山をどう料理してやるのかと考えていた。

三ばかりは今日の報復にうずうずして、逆に狩ってやりたくてしょうがないのだ。僕の出

方をそつと伺っている。彼らにしてみたら母のてまえ僕に仕返しを委ねることはできな

い。ここはなるべく早く意思を示してやらなければならない。

「よし、これだけやられたんじゃ、黙っちゃいらねえからな。俺がやってやるよ」

「待ってました。さすがエフじゃ！」

三ばかりは目を輝かせた。それと同時に目を曇らせた母は、びっくりにした様子で僕に振り

返った。

「あなたはなんてこと言うの、あいた口が塞がらないでしょ。そんなことは絶対にやめて

よ、あなたたちも判った？」

母は三ばかりに目線を移すと、タオルと救急箱を抱えて台所に戻って行った。その隙をつ

いて僕と三ばかりは外へ飛び出して行った。

「お前らよお、俺はケンの家へ行ってくるから、めし喰ったらあの路地裏に集まれよ」

三ばかりに言うと三人は嬉しそうに頷き三本の路地へ散って行った。

仙人山の連中が日本のグループに手を出した以上このままにしておくわけにはいかない

のだ。仕返しを速やかに遂行するには、今まで中華街の路地裏と一緒に戦い続け、日本人

のグループを引っ張ってきたケンの力が重要になってくるのだ。

ケンは、短気と冷静を持ち合わせた静かな少年である。しかし、僕という時は違ってい

た。確かに僕よりは冷静なのだが、怒らすと目には目、歯には歯、いや、棒には鉄パイ

プ、レンガにはブロックといったお茶目なところもあり、相手が年上であるのが平気で向

かっていくし、仲間がやられたりすると直ぐにやり返しに行ったりする頼もしいやつだ。

さっそくケンの家に行くとケンはニヤニヤしながら店の奥にある畳部屋に立っていた。僕

はケンに目配せをして顎を振ると、台南小路の路地裏へ向かった。

* *

*

僕たちのグループと仙人山との因縁は通学路の途中で、あの危険な近道を見つけ出した

頃から始まった。

通っていた小学校は元町商店街から代官坂を登り、代官坂トンネルを抜けた正面、いわ

ゆる山手の丘の上に建ち、そのコースが学校指定の通学路になっていた。しかし学校指定

の通学路なんてクソくらえの僕たちである、学校までの近道を見つけて出してから頻繁に

利用するようになっていた。

その近道は中華街南門から前田橋を渡って元町商店街の裏通りまで直進すると、現在は

その位置にはレストラン霧笛楼と右隣に立体駐車場が建ち並んでいるのだが、ちょうど立

体駐車場の裏側が近道の始まりだった。

当時、立体駐車場は資材置場的な空き地で、その奥には小高い丘が左右に連なり、正面

には高さ二十m、幅十五mほどの崖がいかつい顔を出していた。崖は傾斜がきつく危険な

崖で現在その崖は草や木に覆われて残念ながら目にすることはできないが、僕らにしてみ

れば絶好の遊び場であった。この崖を三分の二ほど上ると直系二m、奥行き三mほどの洞

窟があつたのだが、この丘には防空壕の名残といえる洞窟が幾つか存在していたのだ。

僕らはこの洞窟の中に入ったり、入口の前に横一列に並んでは目の前に広がる横は目の

風景を眺めていた。

ある日、樹木が生い茂った頂上にふと目をとめて登ってみると、目の前には狭いジャン

グルのような密林が現れ、密林を奥へ進むとそこは見慣れた外人ハウスの裏側であった。

そして庭を囲っているフェンス沿いの十mほど先には仙人山の通りが顔を出していた。

この通りを右折して山手通りを目指せば小学校は目と鼻の先であった。山手通りにでる

と右側には汐汲坂が元町商店街へと下り、下り口の横にはフェリスの中、高等部が建つて

いる。そしてその正面には小学校の校門へ続く下り坂が姿を現すのだ。

僕は山手通りまで続くこの通りの両側一帯を仙人山と呼び、頻繁に往来を繰り返す

ち仙人山のグループに遭遇しはじめ、もう一人変わった人物と知り合うことになるのだ。

現在、正式名称は高田坂と呼ばれるこの通りには百段公園があり、通りの両側は住宅で

埋まっているのだが、当時は外人ハウスが主で通りをはさんだ左側一帯には三mほどのフ

エンスが通り沿いに張られ、フェンスの向こう側には外人ハウスの庭園が広がり、二階建

てのハウスが二、三軒あるだけだった。そして右側一帯には緑鮮やかな芝生の庭が広がる

平屋造りのハウスが規則正しく並び、高さ一mほどのフェンスが庭を区切るように張られ

ていた。当然の如くこの仙人山一帯から山手通りには外人さんたちが多く住んでいたのだ

が、仙人山のグループはこの周辺を縄張りにはしていたのだ。

僕は西洋的な顔をした人は皆アメリカ人だと思っていたが、実際はどちらのお国柄な

のかは定かではなかった。しかも仙人山のグループは仙人山に住んでいたわけではなく、

何処から集まるのかは謎であった。そして、僕は彼らを仙人山、もしくはサンダーバー

ドと呼んでいた。サンダーバードは当時の人気番組、テレビ人形劇のタイトルだが、出で

くるキャラクターが全て西洋人だったからそう呼んでいたのである。彼らは日本語を流

暢にしゃべりはしたが、微妙に違う発音や語尾が僕らには爛にさわり、山手周辺で彼らと

遭遇すると必ず喧嘩になった。これといって仲が悪くなった直接的な原因など見当たらず、

他のグループと同様に双方の心の奥に渦巻いていた人種の蟠りと、プライドの主張がぶつ

かりあったのだろう。どうであれ彼らと僕らの対立はこの仙人山から始まり、今もなお続

いていたのだ。

第二章 休戦宣言

「休戦宣言」

市場通りと香港路を結ぶ台南小路には一軒だけ駄菓子屋があり、横の路地裏が日本人ゲ

ループの溜まり場であつた。この路地裏には日本人のほかにも様々な人種のフリーの連中

も顔を出すことがあり、何か問題が発生すると常時十人以上のメンバーが地べたに座り込

んでは会議を開いていた。

「そうかあ……あのばかたちとうとうやられたかあ……今日よお、俺たちが

とんずらしたのがまずかったのかなあ……」

ケンは気まずそうに顔を歪めて唇をかんだ。ケンは心を許した相手には優しい男であ

る。笑っている僕とは大違いだ。

「気にするなって、あれだけ仙人山には行くなって言ってたのによ

お、そんなこと気にも

してねえんだからよお、ばちが当たったんだよ、ばちが・・・ケン
よお、仙人山のやつら

今度は日本人狩りでも始めようとしてんじゃないかねえのか？」

僕は冗談半分で言ったのだが。

「エフもそう思うか、俺もよお、そろそろ来るんじゃないかなって
思っていたんだよな、

けどよお、あいつらもしつけえよな、あれから何ヶ月経ってと思
ってたんだか、今更雪合

戦でもねえだろう。それによお、だいたいあれはリヨウがやったん
じゃないかなあ」

「けどよお、ケン。三ばかり言うには、あいつらは俺らがやった
て決め付けているみた

いだからよお、このままほっとく訳いかねえじゃ」

「・・・・・・・・・・そうかあ！」

ケンは少しの沈黙のあと何かに気づいたように声を上げた。

「何だよ、びつくりすんじゃない」

「エフ、もしかしたらよお、仙人山のやつら、リヨウがやったって

こと気づいてんじゃない

えのか？」

「それだつたら、めんどくせえことしねえで、リヨウに直接言えばいいじゃねえか」

「そうだよなあ、つといてもあいつらにそれはむりかあ」

「・・・・・・・・・・そうかあ！」

「なんだよ、エフ。びっくりすんじゃない」

「あいつらよお、俺たちがリヨウとよく一緒にいるの見てるから、リヨウが俺たちのあた

まだと思つてんじゃないのか？」

「あたまつていえばあたまだけどなあ、でもなあ、リヨウは一匹狼だからな」

「あいつらそんなこと判つちやねえから、下から順番につてことだよ」

「エフよお、今までのこと考えりや、俺たちが狙われるのは判るけどよお、あいつら何で

中華街狩り始めたのかなあ、しかも襲われたのは俺たちとための連中とその下ばかりじ

「や、やっぱり雪の日のことが絡んでんのかなあ？」

「それは関係ねえんじゃないの、あいつらよく中華街におりてきては誰かしらにやられて

たじゃ、だから逆襲にでたんじゃねえか」

「けどよお、エフ。仙人山のやつらリヨウまで狙うと思うか？」

「むりむり、反対に殺されんぞ」

「そうだよな、けどなあ、トップジョージョやブースカのバックには俺たちより上がかなり

いるしな」

「一つ上の黄金バットたちか？」

「ん……あいつらはそれほど怖くねえけど、二つ上のジミーとジョンがでくると

やっかいだよな、その後ろには大魔神も控えてるしよお……」

「デビーか？ あいつはそう簡単にはでてこねえよ。今までだって姿すら見たことねえじゃ」

「けどよお、リヨウをやるとなったらでてくんだろつ。もし、リヨウがやられたりしたら

中華街の四天王が黙っちゃねえぞ。あの、怖い怖い四人が動いたら

全面戦争だな」

ケンは身震いしながらニターッと笑った。本当に怖いと思っているんだか、楽しんでん

だかよう判らんやつだ。

「ケン。そんなことどうでもいいじゃ、それよりよお、その前に関係ねえ三ばかり手をだ

した仙人山をどう料理してやるかだよなあ」

「そうだよなあ、このままやられっぱなしじゃなあ」

ケンは石ころを拾って前の家の壁に投げつけた。すると、小窓がすっと開き、口うるさ

い中国人おばさんが怒鳴った。

「石・・・だめで・・・しょ・・・」

いつものことである。僕とケンはとぼけていた。すると・・・

「わか・・・たああ・・・」と、四角い顔を小窓から出した。僕とケンは立ち上がり、その

四角い顔に近づくとしっかり挨拶をした。

「うるせえんだよ。くそばばああ」

「くそ、ばば、だれ？」

おばさんは細い目を吊り上げた。

「おめえだよ……」

「そうだよ、うるせえんだよ」

僕とケンが頭上になる小窓に背伸びをしたままそう怒鳴り返すと、おばさんはでかい顔

をひっこめ窓をピタツと閉めた。僕とケンは元の位置に戻り座りなおした。

「まったく、毎度、うるせえばあだよ。なんで中国人って早口で怒鳴ってばかりいるん

だろうな、エフ」

「また、太鼓のバチ持って出てきたりしてな」

僕は、クツ、クツ、クツと笑った。

「エフ、話しが判らなくなっちまったよ。なんだっけ？」

そう言われてもケンに判らないことは僕にも判らない。考えていた……

「そうそう、だからよお、早い話し仙人山をやっちまおうてことだよ」

僕はケンの横顔を覗き込んだ。ケンがすぐに乗ってくることは判っていた。今回は三ば

かがからんでいる、僕とて今まで何度とケンに助けられている。ケンが動かない訳がない

のだ。

「そうだな、エフがやんだったら俺もやるからよお、日本人狩りされる前にアメリカに奇

襲しかけるか」

ケンはそう言って二回頷きながら同意した。

「けどよお、エフ。あいつら今日はトップジョーたちもいれて六人いたんだよなあ。コ

ンジンやヨンホウがやられた時は十人以上いたらしいしよお、俺たちより上の連中がごろ

ごろいたみてえだから、俺たちのほかにも何人が連れていくかあ？」

ケンは僕の顔を覗き込むと太めの眉を顰めた。しかし、僕は三ばかとケンを含めた五人

にこだわりの持っていた。この頃この近辺には同学年の日本人が比較的少なかったため、

中途半端でとんづらしそんな同学年よりも、どう見ても年下には見えない三ばかりのほうか

よっぽど安心であつたに違いない。

「五人いれば何とかなるって、むこうの人数が増えたらそんなときはそんなときじゃ、俺たち

が動いたって大魔神やジミーとジョンまでは出てこやしねえから」

「エフは相変わらず三ばかりを買ってるよなあ」

「そうじゃねえよ、俺が頼りにしているのはケンだよ。いざとなったらよお、ケンが一人

で三人やつちまえばいいんだからよお、五人でどうにかなるって」

僕はのんきに言つてケンの肩を叩いた。

「そうだな……えっ？　俺が一人で三人やんのかよお、俺はエフがいるからやるん

だからよお、まあいいや、そんなときはそんなときだな」

ケンものんきに笑つた。そのうちパンチョ、コング、バッハの順で集まりだした。彼ら

は僕とケンの前で胡坐をかいた。

そして、会議は始まつた。結局、気がおさまらない三ばかりの意見

を考慮して、なるべく

早く行動を起こそうということでもとまり、報復の決行日は明日の日曜に決まった。

「エフ、もしよお、仙人山にサンダーバードがいなかったらどうする？」

ケンがいい質問をした。

「そうだよなあ、あいつら仙人山に住んでるわけじゃねえもんなあ、それに何処に住んで

んのかよくわかんねえしな」

「家でもわかれれば乗り込んで一人づつやってやんだけどなあ」

ケンは恐ろしいことを言った。

確かにあの仙人山グループはあの一帯を縄張りにはいたが、何処から集まってくる

のかは謎であった。だから必ず仙人山にいるとは限らない、しかも今回の仕返しは五人で

決行する。簡単に終わらせるにはなるべく早く見つけ出し、トップジョーたちを集中攻

撃したい。山の手周辺を長い時間うろついていると僕らより上の連中が集まる危険性があ

る。そんなところに突っ込んで行つては勝てる喧嘩にも勝てず、それこそ袋たたきあう危

険性大である。僕は噛み切った爪をプッと吹き出した。

「けどよお、よく考えてみい、明日は日曜じゃんか、もし仙人山にいらなくてもあそこに必

ずいるって・・・」

僕は全員の顔を見渡した。

「そうだな、元町公園か港の見える丘公園、もしくはフランス山・・・」

ケンは直ぐにピンときて三ばかりを見渡した。

トッポジージョたちの行動範囲はだいたい決まっている。日曜ともなればケンが言った

ように外人墓地周辺にいるはずだ。その中でも一番確率が高いのは元町公園だろうと僕は

読んでいた。

と、その時だった。台南小路からやっかいなやつが走ってきた。突然現れては何処にで

もついて来たがる二年のカズキである。

「おい、明日のことはカズキには言うなよ」

僕は即座に全員を見渡して口止めた。どこにでもついて来たがるカズキなのだが、明

日は連れていくことは出来ない。僕なりに考慮したつもりだ。カズキはいつものように二

コニコしながら近づいて来た。

「やっぱりここにいたのかあ、探しちゃったよ。エフの家に行ったらいないし、パンチヨ

の家行ってもいないし……ねえエフ、なに相談してたのよお？……」

カズキは息を切らせながらそう言つと三ばかりの後ろにしゃがみこんだ。

「だいたい、なにしに来たんだよお、お前えは？」

振り返りざまコングがカズキの頭をはたいた。

「なにしに来たっていいじゃんか」

カズキは頭を撫ぜながらぼそぼそコングに言い返した。すると、パンチヨがカズキの頭

を取り「相変わらず生意気だな、よかねえんだよ」と言いながらへ

ツドロックを食らわせ

た。

「エフ、なに話してたのよお」

カズキはヘッドロックをされたまま僕の顔を見た。パンチョがヘッドロックを解くとバ

ツハが「なんでもねえええよ」とカズキの頭をはたいた。それでもカズキは僕ににこりと

しながら食らい付いてきた。僕はカズキににこりとされると何故だかこまってしまう。そ

れを察してケンが助け舟をだしてくれた。

「風呂でも行くかって話してたんだよなあ、エフ」

「そう、そう、風呂な、風呂」

僕はケンの助け舟に乗ったつもりだったが、カズキの疑い深そうな顔はそのままだ。す

ると、パンチョが突然、当時の日本全国の子供たちが一度は口にしていた殺し文句。

「あたり前田のクラッカー……だつっの、なあエフ」とつまらないことを言った。

「つまらねえこと言ってるじゃねえよ、このばあか」

ケンが笑いながらパンチョの頭をはたくと、カズキはニコニコしたが、その顔が一瞬に

変わり立ち上がったと思いきや「あつ！ ああああ」と叫び、台南小路方面を指で差しな

がら後ずさりを始めた。僕はカズキが指差す方向にしゃがんだまま目をやった。

すると、十mほど先になる路地裏の入口に頭を包帯でぐるぐる巻きにしたお方と、顔じ

ゆうが赤ちゃんと絆創膏だらけのお方がこっちを見据えながら立っていた。

それを目にした三ばかりは即座に立ち上がり路地の奥へとゆっくり歩きだした。けして逃

げていった訳ではない。彼らの戦う本能である。いつものことだから目的は判っている。

僕らのいる位置から十mほど奥に行くと、コンクリート製で木蓋の付いたゴミ箱が設置

してある。その裏には武器が隠してある。三ばかりはその裏から鉄パイプを五本取り出すと、

引きずりながら戻って来た。

ケンは僕に視線を送りながら「なあんだ、あいつら？」と顎を振った。僕も不気味な二

人を見ながら考えていた。

「ん・・・どう見てもヨンハウ君とコンジン君だよなあ・・・それにしてもなんだよなあ、

あの包帯と顔は・・・」

「あいつら仙人山にそうとうやられたみたいだからなあ、それにしてもあれは大げさだよ

な、けどよおエフ、なんであのばかたちが一緒にいるんだよ」

ケンは不思議そうに二人を見据えていた。確かにケンの言う通りだ。あの二人は敵対し

あっている中国系と朝鮮系親分である。その二人が一緒にいること事態が初めて見る光景

であり信じがたいことなのだ。後ろからバツハが声を上げた。

「エフ、あれやっぱしコンジンとヨンハウじゃ、ちょうどいいからやっちまおうよ、俺た

ちに行かせてよ」

三ばかりは鉄パイプを杖にしながらぞろぞろと立ち上がった。

「ばあか、あわてんじゃねえよ。なあんかおかしいよな、あいつら手ぶらだしよお、なあ

ケン」

「それもそうだよなあ、いつもだったらとくに殴りこんでくるはずだしな、なんか企ん

でんじゃねえのか」

「まあいいや、あいつらも動かねえから様子をみつか、君たちも下品なこと言ってないで、

そんな恐ろしい棒は下に置いて座って座って……」

僕はそう言いながら三人を座らせた。

「エフケン、そんなにのんびりしてて大丈夫かよ、あいつら協定を結んだのかもしれないえ

し」

「そうだよ、台南小路に三十人ぐらい隠れてるかもしれないし」

「ってことは、逃げるか、こっちから行くかのどっちかじゃ」

三ばかはノータリンなことを口々に言ったが、一理ある意見であった。

「ばあか、協定協定って、あいつらが本当に組むと思ってんのか？
なあエフ」

ケン は笑いながら僕を見た。

「その通り、ケンちゃんの言う通り」と、僕も笑いながら三ばかりを見渡した。

その時、コンジンとヨンホウが動きだした。そして、神妙な面持ちで近づいて来た。

どうであれこの二人が現れるとろくなことがない。ちょっとでも心を許すものなら隠

し持った武器で頭をかち割られることもある。ことが起こればカズキは足手まといである。

「カズキ！ ゴミ箱の裏に隠れてろ！」

僕がそう怒鳴ると「ん、うん」と素直に頷き路地の奥へ走って行った。それを見定めて

ケンは三ばかりとカズキに声をかけた。

「お前らよお、路地の奥も見てろ。カズキィ！ そっちから誰か来たら教えるお！」

そして、コンジンとヨンホウは僕らの前で足を止め、ヨンホウが口火を切った。

「お前らよお、そんなに警戒すんなって、お前らよお、その鉄パイプなんだよ……」

警戒してるのはお前らではないか、二人は三ばかりをしきりと気にしていた。

「お二人お揃いで珍しいじゃ、なんか文句あんのか！」

僕は座ったままそう怒鳴ると、上目遣いで二人を睨みつけた。

「エフ……そんな怖い顔すんなよ」

コンジンが落ち着いた口調で言った。

「お前らよお、なにしに來たのかしらねえけど、袋にされたくなくなったら、さっさと帰っ

たほうがいいよ」

ケンも座ったまま二人を威嚇した。すると。

「ばーか、誰がお前らの袋になるってえ、ふざけたこと言っなのやろっ！」

ヨンホウが怒鳴り返した。

「面白いこと言っじゃ……」と、僕が立ち上がろうとした瞬間、バツハとコングが後ろ

から飛び出し、二人の胸ぐらにつかみかかった。しかし、いつもの

二人であれば胸ぐらを

そう簡単につかましたりしない。その前にパンチが飛んでくるはずだ。二人は微動だにし

ない。どうも様子がおかしい。僕はケンに視線を送ると首を傾げた。するとケンも首を傾

げながら言った。

「コング、バッハ、手を離してやれ。こいつら今日は喧嘩に来てねえよ」

ケンがそう言うときコングとバッハはぶつぶつ言いながらも手を離し、僕らの後ろにしゃ

がみこんだ。

「まったくお前ら三人は威勢がいいし、容赦ねえな。俺の子分にしていえよ、けどよお、ポ

ンを子分にするほど俺は落ちぶれてねえからな」

相変わらず口が悪いヨンホウの言葉に切れたのかケンがすつと立ち上がり。

「お前え、それ、どういう意味だ。こらあ！」と、怒鳴った。その瞬間、僕は立ち上がり

ヨンホウの股間を蹴り上げていた。ヨンホウは股間を押さえて膝を

付くと、コンジンが僕

を制止ながらヨンホウをかばっている。はじめて見る光景だ。

「お前らよお、結局、嫌味言いにきたのか？　このやろっ！」

僕は怒鳴った。

「エフ、落ち着けて、ケンが言った通り、今日は喧嘩しにきたんじゃないんだからよお、

ヨンホウ、いいかげんにしとけよお、これじゃ、話しにならねえからよお、今日は俺も我

慢すっから、お前も我慢しろって」

今度はコンジンがヨンホウをなだめている、ビックリした。

「判ったよ、コンジン悪かったな」と、ヨンホウは悔しさを隠し切れずも素直に頷いてい

た。まったくこの二人は頭がおかしくなったようだ。僕はあきれ返ったままケンと座りなおした。すると、二人はすばやく僕らの前で胡坐をかいた。

「エフよお、お前に蹴りくらったの久しぶりだな、効いたよ」

ヨンホウは股間を押さえながら調子いいことを言ってにやっと笑った。この二人がお世

辞を言ってまで俺らに何を聞きたいのだろうかと思つた。

「お前らよお、なに企んでんだ？　だいたい、お前らが何で一緒に俺らのところへ来るんだ

よ。俺らはお前たちに話しなんかねえよ」

僕は二人を睨みつけた。

「お前らよお、俺たちに勝てねえから協定でも組んだのか、どつかにぞろぞろ仲間が隠れ

てんじゃねえのか？」

ケンが疑い深そうな顔で嫌味っぽく言うと、ヨンホウは凝りもせずにかぶりを振った。

「ばーか、ふざけたこと言うんじゃねえよ。お前らなんか協定なんか組まなくても、いつ

だって潰すことはできんだからよお」

ヨンホウとそりが合うやつなどいないのだが、普段からケンとヨンホウはどうもそりが

合わない、言葉ひとつで殴りあうのだ。僕はケンの肩に手を置いてケンを制止ながら言っ

た。

「潰してくれよ・・・」

一瞬、血生臭い風が吹いたが、コンジンがでかい顔をヒクヒクさせながら言った。

「今日は本当に話をしに來ただけだからよお」

「そうやって油断させといていつもみたいに一気に奇襲しかけるんじゃないのか！」

後ろからパンチヨが怒鳴った。ヨンホウは機嫌を直したのか、三ばかりを見上げながらボ

ーズ頭に巻かれているずり下がりそうな包帯を押さえながら言った。

「まったく疑いぶけえなあ、本当に今日は二人しかいねえからよお」

今までのことを考えればこの二人を信用しろということ事態がむりな話である。

「それによお、俺たちがわざわざ組んでお前らのところへこれから奇襲しかけますって言

いに來ると思うか」

コンジンは絆創膏と赤チンだらけのでかい顔に、申し訳なさそうに付いている小さな目

を瞬きながら、見たこともない真面目そうな顔でそう言った。

人のいい僕はひとまず話だけは聞くつもりでいた。しかし、この二人を見ていると今

までのことが脳裏を掠め、むらむらした気持ちになり、本当に二人だけなら袋にするには

今が絶好のチャンスとも思っていた。

「けどよお、ちょっとでもおかしいことがあったら、お前ら二人ここでタコにすんぞ、い

いな覚悟しとけよ」

「わかってるって、ケン。もしよお、俺たちが嘘を言ったらタコにでも袋にでもなって

やつから・・・お前らとは当分、休戦、休戦・・・」

ヨンホウの言葉を続けるようにコンジンが言った。

「とにかくよお、しばらくの間、お前らとは休戦するつもりで今日は来たんだからよお、

だから最近はお前らの前に顔を出さなかったろ」

えっ、休戦？　僕とケンは顔を見合わせた。そのとたん怒りがこみ上げてきた。

「ばあか、今まではりたいたけやつといて休戦だあ、ふざけんじゃねえよ、このばかやる

う。コング、鉄パイプ貸せ！」

それを受け取って振り上げると、今度はケンが僕の肩にそっと手を置いて、にこにこし

ながら顔を左右に振った。ヨンホウとコンジンは身を引いて身構えながら言った。

「エフ、興奮すんなって、やりたいただけやっというてはねえじゃ、そんなのお互い様だろう。」

なあ、ヨンホウ・・・」

コンジンは普段はこんなに落ち着いたまともなやつなのかと、錯覚させるように痛くそ

の通りなことを言った。今の状況では彼らがふりなことは彼らが一番よく判っている。そ

れを承知の上でここにおいて休戦するとまで言った。まったく勝手なやつらではあるが、僕

は努めて話を聞くことにした。

「判ったよ、話しはちゃんときくから・・・」

僕がそう言うと二人はほっとした表情をした。

「それにしても、お前らもすげえ顔してんなあ・・・」

ヨンホウはそう言いながら三ばかりを見回すと、コングが言い返した。

「お前らに言われなかねえよ、お前らのほうがすげえ顔じゃ」

「どことやって来たんだよ、それにしてもエフケンはきれいな顔してんじゃ」

コンジンがそう言いながらクツ、クツ、クツと笑った。それにしても不思議な光景であ

った。この二人が僕らと笑いながら話しているのだ。それこそ彼らと協定を結び仲良

く手と手を取り合えば中華街が平和に……なんてことがあるはずはない。

「俺たちがいねえときにこの仙人山なんか行くからこんな顔になっちまうんだよ」

僕が答えると、ヨンホウがにやっとした後、眉間に皺をよせながら言った。

「そりゃ、話が早いや」

「それ、どういうことだよ」

ケンが不思議そうな顔をした。

「って、ことはよお、お前らもあのアメリカに恨みがあるってことだよなあ」

「ばあか、そんなの昔っからだよ、俺たちはお前らも相手にしなきゃなんねえし、仙人山

も相手にしなきゃならねえから忙しいんだよ」

僕は二人の顔を交互に覗きこんだ。すると二人はにやっとして言った。

「そうかそうか、実はよお、今日はその仙人山のばかたちのことを聞きたくてよお、お前

らだったらあいつらのこと詳しいだろ」

「俺たちは学校も違うし、そんなに山手のほうにも行かねえから、どうもあいつらのこと

がよく判らなくてな、仕返しに行きたくても動きがとれなくてよお」

確かにヨンホウは朝鮮学校でこの地域からは遠方だ。コンジンとて中華街の中にある中

華学校ではあるが、山手に頻繁に出向かない限り仙人山の情報をつかむことは難しいであ

ろう。

「ヨンホウよお、俺たちのところへこなくても、お前らの縄張りに

俺たちと同じ学校のや

つがいるじゃねえか」

ケンが聞き返した。

「いることはいるんだけどよお、お前らほど詳しくねえし、仙人山とやりあっているのは

お前らぐれえだと思つてよ」

「それだったらコージでも連れて行けばいいじゃ、強えし、以外と仙人山のこと詳しかつ

たりして」

僕が嫌味つたらしく言つて笑うと。

「あんなばかだめに決まってるだろ」と言つてヨンホウはため息をついた。

コージは僕たちと同じ学年だが、低学年の頃僕らの学校からヨンホウと同じ学校に転校

して行つたのだ。僕とケンは幼稚園の頃から彼とは気が合い、朝鮮系にしては珍しく仲が

いいのだが、ヨンホウとはすこぶる仲がわるい。この場所にも時々顔を出しヨンホウたち

の情報を流してくれるありがたいお方なのだ。しかし、喧嘩をやらせたらこの地域では――

番強いのではないかと僕たちも認めている。だからこそ、ヨンホウにしてみれば目の上の

たんこぶのような少年なのだ。

「コンジンはどうなのよ」と、僕はでかい顔を覗きこんだ。すると、だめだめっという素

振りで手のひらをでかい顔の前で左右に振った。コンジンの手がやたらと小さく見えた。

「そんなことないんじゃないのお・・・ほかにもいるんじゃないの
お・・・」

僕はにやにやしながら二人を見た。

そうなのだ。この二人には神様のように崇め、自分たちがふりな状況においてその名前

をだせば、だいたいの連中は逃げてしまうようなお方がいる。僕はその二人を思い浮かべ

からかい加減で名前を出した。

「キートンは中華学校だから仙人山のことは詳しくねえかもしれねえけど、リヨウがいん

じゃ、リヨウに聞けよ。なあケン」

「そうなあ、キートンはあてになんねえな、仙人山のことならリヨウのほうがいいな」

「そんなのお前らに言われなくてもとつくにやってるよ。キートンもリヨウもあてになん

ねえからお前らのとこにきたんじゃねえか」

ヨンホウはそう言って肩を落とした。

「やつぱり……」

僕とケンは笑いながら顔をみあわせた。

「実はよお、仙人山のグループが俺たちやヨンホウのところへ現れてからよお、毎日リヨ

ウのところへ行ってたんだけどよお、リヨウは知りませんの一点張りだよお。一緒に仕返

しに行ってくれって頼んでもよお、あいつらには近づくなって、話しにならなくてな、だ

から、ヨンホウとも休戦して組んでやり返しに行こうと思ってよお、それには仙人山のこ

とを少しは知っておかねえと思って、ここに來たって訳よ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・？」

このぼかばかした陽気の中、コンジンの演説を聞いているうちに眠くなって、腕を組んだまま目を瞑っていた。

「お前ら、失敬だな、聞いてんのかよお・・・・・・・・？」

その声に我に返った僕は、隣のケンに目をやった。すると、ケンも腕を組んだまま瞑想

中であつた。

確かに敵対し合っていた朝鮮系と中国系のグループが、一時であれ組んでそのトップで

ある二人が僕たちの縄張りで自分をさらけだしているのは、彼らにとって仙人山のグループ

は馴染み少ない西洋人で、白人、黒人ともなると得体の知れない相手に違いないのだ。

「コンジンよお、キートンにも仕返しのこと話したのかよ、うまく動かないとやり返す前

にまた仙人山にぼこぼこにされんぞ」

僕はそう言うてにやにやししながらコンジンの顔を覗きこんだ。

「ああ、キートンにも話したけどよお、ぜんぜん相手にしてくんなくてよお」

「そりゃあそうだよな、中華学校を仕切っているキートンがお前らの相手なんかするわけ

ねえじゃ。クツ、クツ、クツ」

そう言つてケンが笑った。

「なに、笑つてんだよお・・・」

コンジンのでかい顔がさらに膨れ上がり、申し訳なさそうに付いている目が三角になつ

た。その不気味な顔に参ってしまったケンは詫びをいれた。

「わりい、わりい、けどよお、キートンはそんなお人よしじゃねえつてこと、お前だつて

判つてんだろ。だいたいキートンは意地が悪いんだからよお」

「ん、まあ、そうだけどよお・・・」

おかしい。実におかしい。今日のコンジンは素直である。いつもであればヨンホウより

コンジンのほうが手が早く、根にもつタイプである。ケンとのこれだけの会話で殴り合っ

ていてもおかしくないのだ。仙人山の情報を得て仕返しを実行するためにプライドも捨

てられるということだろうか。

「けどよお、キートンがいい作戦を教えてやるって言うてくれてよお、それもあるってここ

に来たようなもんだからよお……」

コンジンは意味ありげににやりとした。

「えっ？ えっ？ えっ？……え……？」

僕とケンはキートンのいい作戦と聞いて身震いがした。どうせろくでもない作戦である

ことは確かだ。しかし、考えてみれば僕らには関係のないことである。そうであれば興味

津津聞くことにした。

「コンジンよお、そのいい作戦ってどんな作戦だ？」

「言いにくいんだけどよお……やり返しに行くならあの二人を連れて行けって言うから

よお……」

「キートンが言うんじゃ、あの二人だな……けどなあ、あの二人

が行ったらいへんな

ことになるぞ。けどなあ、あの二人が行ってくれるかなあ？ あの二人はエフのことだっ

たら行くかもしれねえけど、お前らの頼みじゃなあ……どう思うよ、エフ」

そう言っただけでケンは困ったように眉を下げながら僕の顔を見た。ケンの言いつぷりで誰の

ことかは察しがついた。

「そうなあ、あの二人は年下の喧嘩には口を出さないからなあ」

「あつ、そうかそうか、それをエフからヤンとロンに頼んでほしいのか、それでここに来

たってわけだ」

ケンがコンジンの顔を覗きこむと、コンジンは一つため息をついた。言った。

「お前らよお、いったい誰のこと言っただよ。誰がヤンとロンだなんて言っただよ。

あのヤンとロンが行ってくれる訳ねえし、得にロンにそんなこと怖くて言えっかよ」

「そうだよなあ、ロンは確かに仙人山の連中と同じような顔してる

しな」

クツ、クツ、クツと僕は笑った。

「ヤンとロンじゃねえってことは誰だよ。キートンはいつたい誰を連れて行けって言った

んだよ」

ケンはそう言いながら胡坐を揺らした。

「エフケン・・・お前とお前だよ！」と、コンジンは僕とケンの顔を指で差した。

「え・・・・・・・・・・・・・・・・？」

僕とケンはあまりの驚きに胡坐をかいまま後ろへ倒れこんだ。
自分らの名前を言われ

て驚いたのではない。キートンの嫌がらせの予感が的中したことに驚いたのだ。

「そんでよお、キートンが二人で足らなかったらお前ら三人も連れて行けって言ってたっ

け」

コンジンは三ばかりを見回した。

「なあんで、俺たちがお前らの仇を取りにいかなきゃなんねえんだ

よ
「

「ほんとだよなあ、冗談じゃねえよ」

「エフケン、まさか、行くわけねえよね」

三ばかりは口々に騒ぎ始めた。

「行く訳ねえだろ、なあ、エフ」

ケンの言葉に三回頷いたが、正直なところ今日のコンジンの様子を見ているうちに、一

回ぐらい行ってやってもいいかなっと、少しは情が沸いたのも確かであった。しかし。

「ヨンホウ、コンジン。ケンもこいつらも納得してねえから、俺らはお前らと一緒に向こ

うの縄張りに乗り込むことはできねえよ。けどよお、今度あいつらが中華街に乗り込んで

きたら、俺たちもやつから、そのかわりあいつらの弱点とか、溜まっている場所とか、聞

きたいことは教えるから・・・ケン、そのぐらいはいいよな・・・

「

「・・・ん、まあ、しょうがねえな。どっちにしても俺たちは明日仙人山へ乗り込む

から」

「なあんだよお、それだったら俺たちも連れていけよ、ケン」

ヨンホウはケンの言葉に目をぎらつかせた。

「だ、か、らあ、明日はこの三人のおとしまえ付けに行くだけじゃ、お前たちの仇は打た

ないって言ってるんだろ。わかんねえやつらだな、まったく！」

ケンがむっとしてヨンホウとコンジンの顔を覗きこむと、二人の眉毛がピクピクと動い

た。一瞬、彼らとの間にまたもや血生臭い風が吹いた。まずい、ケンが戦闘準備に入っ

ている。しかも後ろにいる三ばかりは既に立ち上がっている。このままでは僕の出番はなくな

ってしまう。

「まあまあまあ・・・どっちにしてもよお、明日俺たちが行って様子を見てくつから、そ

んで何か変わったことがあったらお前たちに教えるから」

僕は心にもないことを言つとケンとヨンホウの肩を叩いた。

その後、ヨンホウとコンジンの質問攻めは続いたが、ほとんどの加減なことを並べた

てて答えておいた。ざまあみろである。しかし、彼らは今まで見たこともない爽やかな顔

をして去って行った。

第三章 元町公園の戦い

第三章

「元町公園の戦い」

翌日の日曜日。僕は小公園に集結していた。

小公園は中華街大通りから上海路を抜けた突き当たりに位置する関帝廟通りにある公園だ。正式には山下町公園という名称だが、この周辺では小公園と呼ば

れていたのだ。その由来も単純明解で、山下町公園と山下公園、文字と呼び名はよく似て

いるのだが、規模が比べようもなく違う。小公園は五十m四方のごく一般的な公園なのだ

が、山下公園はあの規模だ。どう考えても山下町公園の方が小さいから小公園と呼ばれて

いたのだ。と思う。確かにどちらも僕らにしてみれば遊び場であったが、毎日のこととな

ると小公園に集まる子供たちが多かったのだ。

当時、小公園には様々な遊び場があり、関帝廟通りからの入口右手に砂場とドカンの遊

び場があった。ドカン直径一m、長さ三mほどの大きさのものが三本ほど丁の字に直結

され、横向きのドカンの端には鉄の梯子がかかり、登ると幅ご五十五cm、長さ三mほどの

鉄板の通路が引かれ、その先は滑り台に繋がっていた。鉄板の通路の下には一本だけ独立

したドカンもあり、それらの回りを取り囲むように、クリーム色で二十cm幅のコンクリ

ート塀が建っていた。なかなか複雑で説明しにくいのだが、当時としては楽しい複雑な遊

び場が設置されていたのだ。ただし、長さ、高さ、色などは定かでない。

公園の中心になる入口の対角線上五十mほど先には裏口があり、その他にもそれぞれの

通りの抜け道になる路地が何本があった。そして、裏口の右側には駄菓子屋、左側の奥か

らシーソーが二本、ブランコが四本、ロケット型のジャングルジムが並んでいて、その横

に町内会館が隣接していた。駄菓子屋から右側には住宅と中国系の

幼稚園もあり、今も保

育園として影を残している。

当時、この公園に集まる子供たちのお国柄も性質、性格も様々で、それぞれのパワーが

爆発していた公園だったのだ。そして、中華街になる以前に南京町なんきんまちとし

て親しまれてきたなごりからか、この公園の周辺を南京町と呼ぶ人たちが多かったのである。

る。

その日は午前中から快晴で暖かく、絶好の仕返し日和であった。僕らは仙人山のグループ

への報復を決行するべく、小公園の裏口から延びる路地を仙人山へと歩きだした。

ふと見ると三ばかりの手には鉄パイプと角材が握られている。殴り込みの時の鉄パイプは

いつものことだが角材は何処に隠しておいたのか不思議であった。

「おいおい、お前らそんなもんどっから拾ってきたんだよ・・・？」

僕が笑うとパンチヨが僕とケンの手元を不思議そうに覗き込みながら言った。

「そういえばエフケンは何で手ぶらののよ？ あいつらこれでぶっ叩いてやんに決まっ

てんじゃ。なあ、そうだろ、コング、バツハ」

パンチヨは親分気取りでコングとバツハにじろりと目線を送った。すると。

「そうですね。パンチヨ様・・・」と、コングは切れ長の目を三角にし、バツハも二重の

クリクリした目を三角にして引きつった顔で苦笑いをしていた。

どうやら今日はパンチヨが親分らしい、何があったのかは知らないが事前にコングとバ

ツハを子分にしていたようである。

この三人はどんぐりの背比べといったところで上下関係はないのだが、ひょんなことが

ら一人が親分になって一日逆らってはいけないという決まりがあるらしいのだが、一日ど

ころか何時間ももったためしはないのである。

「パンチヨ親分。そんな物騒なもの持っていなくても、今日は大

丈夫だと思っんですけ

ど。もし仙人山の連中がいなかったら邪魔でしょうがないと思っんですけど……」

前田橋を渡りかけた時、ケンがパンチヨ親分に敬意を示してその声をかけると、単細胞

のパンチヨは握った角材をしげしげと見つめた。

「そうかなあ？……そうだな。二本持ってるって邪魔だな、捨てるか。おいっ、お前たち

も捨てる！」

パンチヨ親分は子分に向かってそう叫んだ。子分たちは「がつてんでい」と言われるま

まに角材だけを次々に前田橋の上から堀川にぽっぽり投げてしまった。そのとたん橋の下

から声が飛んできた。

「くおらあ、誰だあ！」

橋の上から堀川を覗きこむと、三ばかりが投げ込んだ角材を握ったおじさんが睨んでいた。

中華街と元町を結ぶ前田橋の下には堀川が流れている。当時、この堀川から延長する中

村川には船を住居にしている人たちが大勢いて、船から学校へ通っていた子供たちがいた

のだ。だから川の両側には船が隙間なく停泊していたわけで、そこへむやみに物を投げ込

んではいけないのだ。しかも角材を投げ込むなんてもってのほかだ。僕らは反省をしてき

つちりとおじさんに挨拶をしておいた。

「うるせえんだよ、このばあか！ 悔しかったらここまで来てみる！」

五人揃ってあっかんべえをすると逃げるように前田橋を渡り、突き当たりの元町裏通り

から近道の崖を登り、密林を抜けて仙人山の通りに出たのであった。

そして、代官坂へ下る石段から山手通りまでの一帯を四方八方に散りながら、サンダー

バードたちを見つめるべく行動を開始したのであるが、静まりかえった外人ハウスには人

影はなく、彼らを見つけたすことは困難であった。

あきらめが早いのも僕らのいいところである。さっそく次ぎの目的地である元町公園へ

移動を開始した。

浅間坂の長い石段を下って代官坂を右に登り、元町公園へと続く
百mほどの道を左に入

って行くと、奥に進むにつれて太陽は樹木に塞がれ、元町プールの
正面にたどり着くころ

には空気もひんやりしてくるのだ。

元町プールは小高い森に囲まれていて、何処から登っても山手通
りに出ることができる

のだが、ちょうどこのプールの上あたりがエリスマン邸あたりであ
る。

そして、プールの正面から石段を降りると子供プールがあったの
だが、現在では姿を消

し噴水が設置された落ち着いた空間に変わっている。

夏になるとこの辺りは僕らのような迷惑な子供の歓声でにぎやか
になるのだが、シーズ

ンオフは日曜といえども静まり返っているのだ。その日も同様であ
った。僕らは出入り口

になるチケット売り場の前に座り込むとさっそく作戦会議を開いた。

「エフよお、もしここに仙人山がいたとしても人数が多かったら突っ込んで行けねえよな」

「まあな、十人ぐらいいたら様子を見たほうがいいよな。けどよお、トッポジージョとブ

スカは昨日と同じで六人でづるんでいることが多いからよお、トッポジージョさえ見つ

け出せばなんとかなるって」

「そしたらよお、六人だったら五人で一気につぶすか？」

「そうだなあ、あいつらが六人だったら俺とケンより年下の三人は三ばかりに任せて、トッ

ポジージョたちは俺とケンで・・・」

その時、バツハが顔をさっと上げて。

「あんな三人どうでもいいからさあ、トッポジージョたちは俺らにやらせてよ、ぶったた

いてやるよこれで・・・」

バツハはそう言いながら鉄パイプをアスファルトに打ちつけてコングとパンチヨの顔を

覗き込んだ。

「そつだよ、あの年上の三人は許せねえから俺ら三人がやってやるよ」

そう言つてコングはパンチヨの肩をたたいた。すると。

「おいおい、お前らよお、なんで俺より先にそういう発言をすんだよ。十年早いんだよ！」

と、パンチヨが怒鳴つた。パンチヨはバツハとコングの親分であることを覚いたが、バ

ツハとコングはすっかり忘れていた。

「そつだった、そつだった。親分、申し訳ねえ、すっかり忘れていて、じゃ、どうぞ・・・」

コングは引きつった笑みを浮かべたまま手のひらを上に向けて前に差し出した。

「わかりやいいんだよ、わかりや。まっ、すっかり借りを返すのが俺らのやりかただから

な」

と、パンチヨは気をよくしたのか咳払いを一つした。すると。

「親分、言いたいことはそれだけですかあ？」

と、バツハは大きな目を細めながらパンチヨの顔を覗き込んだ。

「そんなことはねえよ、だ。か、らあ、あの三人は俺らがやんだよ」

「おやぶーん、それは僕が言いましたけど・・・」

コングは追いつちをかけるが如くそう言って引きつった笑みを浮かべた。すると、パン

チヨは真っ赤な顔をして言い返した。

「うるせえなあ、まったくよお、口答えばかりしやがって、この口がまだ言うか！」

と、コングの唇をつねりあげた。

「んがぁ、おやぶん、いだいですよ」

と、コングは笑っているが、目は笑っていない。このへんで止めなければ仕返しを決行

する前に自爆してしまう。いつもそうなのである。結局、親分ごっこは二対一で親分が

ふりになるものなのだ。

「ばあか、いいからもうやめろ！」

ケンが立ち上がると三人の頭をはたいた。しかし、気がおさまらないのはパンチヨであ

る。コングはそっぽを向いてしかと、バッハはその光景を見ながら手を叩いて笑っている。

パンチョは下唇を突き出したまま下目づかいで二人を睨みつけていた。

「とにかくよお、トップジョーたちをお前らにやらせたら俺たちが来た意味がねえじゃ、

なあエフ」

ケンはそう言いながら握った右拳を左の手のひらに叩き付けた。

三ばかりは僕とケンがいることでいつも以上に強気である。昨日のことを思えば三ばかりの

気持ちも判らないではないが、この近辺はあいつらの地元と言ってもいい地域だ。油断をして

いれば何処からともなく人数が増えだす危険性は多分にあるし、三対三であれば三ばかり

かにも勝算はあるが、今までの経験上トップジョーとブースカはなかなか手ごわい、サ

ンダーバードたちの人数しだいではきれいことは言っていられなくなり、展開も複雑に変

化していくだろう。僕とケンにしてみればサンダーバードたちが二度と三ばかりに手をださ

ないように傷めつけなければケンが言ったように来た意味がなくなってしまう。

「そしたらよお、あいつらが三人しかいなかったらお前たちにやらせるから、けどよお、

それ以上いたらこの中で一番強いケンちゃんが一人でやるからよお・
・・・」

冗談半分の僕の言葉に三ばかりはケンを見ながら三度頷いた。

「えっ?・・・エフよお、冗談だろ?」

ケンは太い眉毛を八の字にしてこまったような顔をした。

「ケンちゃん、冗談ですよ・・・三人以上いたら全員でやる。けどよお、もし、黄金バツ

トやジミー、ジョンがいたら隠れてるよ。絶対に見つかるなよ。いないとしても俺たちが

行くまで手をだすなよ、わかったか?」

僕はそう言いながら三ばかりを見渡した。

「ああ、ああ、あれな、そうだな、また連係プレーでいくかあ、クッ、クッ、クッ」

僕とケンは笑いながら立ち上がった。

そして、僕とケンは元町プールの入り口から左側の森へ、三ばかりは右側の森へと二手

分かれて行動を開始した。

ケンと森の丘を登り始めているとき、すばらしいことを思いついた。

「ケン・・・探し回るのも面倒だからよお、あとはあいつら三人に任せて休んでようか」

ケンは嬉しそうな顔を僕に向けると言った。

「エフはすばらしいことを思いつくな。いいこと言うじゃ」

と、いうことで、ケンと二人山手通り手前のベンチに腰掛けてのんきに休んでいた。

はじめからそのつもりである。面倒なことは三ばかりにやらせておけばいいのだ。

「ケン・・・こっち側には誰もいねえな」

僕は探そうともせずに勝手に決めつけたが、以外ときまじめなケンは辺りをきよきよ

ろしながら探していた。

「エフ・・・その通りを張っていたほうがいいかもな」

ケンは山手通りを指でさした。僕は探そうともせずに次ぎの場所を考えていた。

「ケン・・・ここには誰もいなそうだからフランス山へ行くか・・・」

「そうだなあ・・・」と、ケンが眉をしかめたその時だった。

僕とケンを呼ぶ声が森の中をこだました。

「あれえ・・・まさか、もう見つけちゃったのかよ。ゆっくり休んでいられねえじゃ」

「エフ・・・向こう側の広場だ。行ってみるかあ」

そう言いながらケンが指をさしたのはエリスマン邸の裏あたりだ。

僕とケンは見つからないように、いったん森の中を下り舗装された道を走り、反対側の

森の丘を駆け上がった。

広場に出ると二十mほど先で、サンダーバードらしき連中を鉄パイプを振りかざしながら

ら追いかけている三ばかりの姿が目に見えび込んできた。まったく人の言うことを聞かない恐

ろしい三人である。

「しょうがねえなあ、もう始めてるよお・・・」

ケンはそう言いながらあきれ返った顔をした。僕はあわてて三人を呼び止めた。

「コーング！ バッハー！ パーンチョ！」

僕が呼ぶ声を聞いて、三ばかは足を止めてこちらに顔を向けるなりニヤリとした。それ

と同時に仙人山の連中は固まりはじめ、三ばかの前に三人、その後ろに三人、ふてぶてし

い形相で僕らの方を見据えている。どうやら、前列で睨みをきかせているのはトツポジー

ジヨたち三人だ。それ以上年上の連中はいないようである。その時、三ばかが飛びかかり

そんな動きを見せた。

「ばーか、お前ら手をだすな！」

僕は三ばかを制した。

「ケン・・・面倒だから二人でやっちゃまうか？」

ケンの顔を見ると「OK、OK!」と、ケンは右こぶしを左の手の平に叩きつけながら

首を右に傾けた。僕とケンには戦闘態勢に入ってから相手にむかつて行くときに独特のポ

ーズをとる癖があったようだ。僕とケンにしてみれば意識的にしていることではなかった

のだが、自然にあごを引きながら首が右に傾いていたらしい。

僕とケンは首を右に傾けるとあごを引いた。そして、トップジョーたちを睨みつけな

がらゆつくりと近づいて行った。

彼らまで5mほど近づいた時、左側にいたケンが声をあげた。

「こおら、お前えら、よくも昨日はやってくれたなあ！　きっちり返してやつからなあ！」

彼らはフンと鼻をならすとニヤリと笑った。その人を見下したような顔を見た時、僕の

感情は一気に頂点へと登りつめた。

「このやろっ！・・・」

僕は先制攻撃をしかけるべく、ケンより一歩前へでると、トップジョーの一m前まで

近づいた。すると、トップジョーたちの後ろにいた三人が後ずさりをはじめ、目を丸く

して「OH!」と叫びながら、まるで化け物でも見たかの形相で逃げ出した。僕の顔を見

たとたん逃げ出すとはたいへん失礼なやつらだ。しかし、初めからさこには用はない、さ

つさと尻尾をまいて逃げてくれたほうが手間がはぶけるのだ。だが、彼らはただ逃げた訳

ではない、仲間を呼びにいった可能性が高い、さつさと終わらせなければ、危ない、危ない。

い。

と、その時、勢いよく近づいた僕の左頬にトッポジージョの右フックが「ガッツーン!」

とカウンターとなって食い込んだ。この瞬間、奥歯がほつぺたの裏側に「グニユツ」と突

き刺さったのが判った。

先制攻撃をしかけようと近づきすぎた僕がトッポジージョの先制攻撃を受けてしまった。

我ながらにして間抜けである。しかし、パンチの威力はたいしたことはない、いかにも

やられる前につい手がでてしまいました。御免なさい、といった腰

の入っていないパンチ

で脳が揺れるまでのことはない。ところが、その瞬間、すばやい速さでケンがトツポジー

ジヨの急症を右手で払っていた。と、思ったらしっかり握っていた。

ケンは急症を握りながらにやりと不気味な笑みを浮かべ、急症から手を離すと殴りかか

ってこようとしたブースカの顔の前で握っていた拳をパツと開いた。すると、ケンの指先

がブースカの両目にチョン、チョンと当たった。たまらないのはブースカである。「AO

H!」と叫び両目を押さえながら膝をついていた。そして、ケンはもう一人に飛びかかっ

ていった。

その間、僕はトツポジージヨの左のつま先に右足のかかとをおもいつき蹴りおろして

いた。かかるとにグニューっという感触があったとたんトツポジージヨの口から「OH!」

と声もれた。効いてる、効いてる。今がチャンスだ。左手でトツポジージヨの首を横か

らガシッと押さえつけ、右拳でわき腹を素早く連打し、両耳を両手でつかむと引っ張り上

げた。すると、トップジョージョは背伸びをしながら、まるでムンクの叫びのような形相に

なり「OH、OH、OH！」と小刻みに声を上げた。

その時、僕のおでこは、どう見比べても高くて形のいい憎き鼻に標準を合わせていた。

そして、トップジョージョの両耳を握ったまま僕はおでこを憎き鼻に振り下ろした。

「ガツーン」という音とともにチョーパン（頭突き）はみごとトップジョージョの鼻に炸

裂した。と、思いきやトップジョージョの体から力が抜け崩れ落ちる瞬間だったため、頭と

頭がごつつんこ状態であった。

まだまだ僕のチョーパンは甘い、朝鮮系のダイヤリヨウのもとで修行を積まなければな

らないようだ。

しかし、どうやら僕の頭のほうが固かったようで、トップジョージョは急症とおでこを押

さえながら崩れ落ちていった。

その時、ブースカたちがケンの隙をついて逃げていった。それを三ばかりが追いかけよう

としたが「追いかけるな！」とケンが三人を制した。深追いは確かに危険だ。けしてブー

スカたちはただ逃げて行ったわけではない。そんなにあまい連中ではない。仲間を引き連

れて必ず戻ってくる。ケンもよく判っているのだ。

僕は三ばかりを見張りに立たせた。ケンは近づいてくるなり、横たわっているトッポジー

ジヨに馬乗りになった。そして、胸ぐらを両手で掴んだ。僕は苦痛で顔をしかめているト

ッポジージヨの頭の横にしゃがみこむと、その顔を上から覗きこんだ。

「お前えよお・・・昨日はよくもあいつらをやってくれたなあ・・・それと雪の中に石を

入れてぶつけたとかなんとか・・・いつまでもつまらねえこと言いやがってよお、面倒く

せえから石ごと口の中に突っ込んでやるうか？」

僕は手元にころがつていた十cm大の石を掴んで、トッポジー
ヨの唇に押し当てた。

トッポジーヨは「ププツ」と唾を出しながら顰めた顔を左右に振
った。

「おい、俺たちは何もやっちゃねえから、勘違いすんなよ。このば
あか」

そう言いながらケンはトッポジーヨの頭をはたいた。すると。

「お前たちじゃなくても・・・お前たちのボスがやった。だから、
お前たちにも責任があ

るんだ・・・」

トッポジーヨは唾をためながら口ごもに言った。

「ボス・・・？　ボスって誰のことだ？」

僕はトッポジーヨの目を覗きこんだ。すると。

「あいつだ。お前たちより一つ上の・・・」

トッポジーヨの青い目玉がジロつと上に動いた。そのとたんト
ッポジーヨの胸ぐら

を掴んでいたケンの手元に力が入った。

「ばあか、お前え、リヨウのこと言ってるのか？　リヨウは俺たち

の親分でもなんでもね

えよ。リヨウはなあ、親分とか子分とか好きじゃねえんだよ。何にもわからねえでつま、

らねえこと言ってんじゃねえよ」

ケンが目を吊り上げて、掴んだ胸ぐらを持ち上げると地面に叩きつけた。トッポジージ

ヨは軽く咳き込んだあとゆっくりと口を開いた。

「あいつは日本人じゃないよな・・・」

そう言いながらトッポジージヨは苦しそうな顔で僕を見上げた。

「おい、リヨウが日本人じゃなかったらなんなんだ？」

僕がそう答えると、ケンが何かを思いついたように声をあげた。

「そうかあ！ だからお前たちは無差別に中華街の連中を狩りはじめたのか、けどよお、

なんでお前らは、あんな雪のことでそんなにむきになってんだ？」

「あいつはあの時、デビーの弟を何度も、何度も、わざと攻撃していたんだ」

「デビー？ あれはデビーの弟だったのか？・・・」

僕はケンと顔を見合わせた。

「そうだ、デビーの一番下の弟だ。お前たちは知らなかったのか？」

トッポジージョはそう言って不思議そうな顔をした。僕とケンは目を丸くした。このデ

ビーというのは仙人山のグループを影で操る大ボスである。普段は姿を見せず、それこそ

僕たちを相手にするようなレベルのお方ではないのだ。

「だから、お前らはデビーの命令で中華街を狩りはじめて、リヨウをおびき出そうとしたのか？」

僕が質問すると以外な言葉が力強くかえってきた。

「ちがう・・・あいつがデビーをおびきだそうとしたんだ。あの時だけじゃない。あいつ

はもつと前からデビーをおびきだす為に俺たちにも嫌がらせをしてきたんだ」

「ケン・・・こんな話リヨウから聞いたことあるかあ？」

ケンは黙って首を左右に振った。

「だいたいよお、なんでリヨウがデビーをおびきだそうとすんだ？」

僕はそう言ってトッポジージョのおでこを叩いた。

「わからない、それは俺たちにもわからない・・・」

トッポジージョは首を左右に振った。

思い返してみれば・・・あの日、確かにリヨウは三ばかよりも年下であろう一人に狙い

を絞って、石を入れた雪だんごで集中攻撃をしていた。しかし、それが何のためなのか、

リヨウはなぜデビーをおびき出そうとしているのかは、その時の僕とケンには理解不能で

あった。

「どっちにしてもよお、お前らが朝鮮狩ろうが中国狩ろうが、リヨウはびびりやしねえか

ら、こそこそしてねえで直接リヨウのところへ行つてかたをつけたらどうだ。それができ

ねえからって、年下ばかり狙ってんじゃねえよ。お前らの上に言うておけ、こんなことぐ

らいじゃあのリヨウは動かないってよお」

すると、トッポジージョは首を起こしざまに言い返した。

「ふん・・・それはそのうち俺たちの仲間が行くから、それにお前たちもこれからは気お

つけたほうがいいぞ」

トッポジージョは口を半分吊り上げてふてぶてしい笑みを浮かべた。彼にも意地がある

のだろう。この場に及んでも強気の状態は変わらなかった。

「ばあか、来るならいつでも来いよ。相手になってやっから、なあ、エフ・・・」

「その通り、ケンちゃんの言う通り・・・けどよお、いいか二度と関係ねえあの三人には

手を出すんじゃないぞ。こんどやったらこのぐれえじゃすまさねえぞ、わかったか？」

僕はそう言いながら一発頭を殴った。すると「お前え、わかってんのかよお！」と、ケ

ンは握っていた胸ぐらを引っ張りあげて、地面に叩きつけた。ケンの迫力にトッポジョー

は目を丸くして二回頷いた。

「ケン、行こうぜ、いつまでもここにいと危ねえからよ、とんづら、とんづら」

「それもそうだな、行け、このばあか！」

ケンはそう怒鳴って胸ぐらを離し、トップジョージョを睨み付けながら顎で指示をして立

ち上がった。同時に僕も立ち上がると、トップジョージョはムクつと立ち上がり、山手通り

方面に走りだした。

僕の口の中は先程から鉄のような味で充満していた。僕は歩きながら溜まっていた唾を

おもいきり飛ばした。唾は真っ赤な血に変わり若葉の上に飛び散った。

僕らは辺りを気にしながら元町公園の森の中を駆け下りていった。元町プールのチケッ

トう売り場まで来た時・・・仙人山のグループの騒ぐ声が森の中に響き渡っていた。

危ねえ、危ねえ、とんづら、とんづら……

第四章 特別家庭訪問

第四章 「特別家庭訪問」

明治六年に創立されたこの小学校からどれくらいの数の生徒が卒業して行ったのだろう。

正門から校舎まで心臓破りの上り坂が二十mほど続き、左側には公園のような下庭が広

がっている。この上り坂は坂の多い山手を象徴した学校の顔とも言えるのだ。

坂を上りきると左側には、この学校のもう一つの顔と言える長いすべり台が、校舎と下

庭をつなぐように二列で設置されていた。このすべり台は十五mほどの長さがあり、中間

地点が三十cmほど平になっていたため、上から一気にすべり降りて行くと体がバウンド

して、時にはコースから外れて下までころげ落ちたり、すべり台の板版がはがれているこ

とに気づかずに半ズボンの又を引っ掛けてスカートに変身させて帰ったこともあった。当

時にしてみれば画期的なすべり台だったのではないだろうか。しかし、このすべり台も姿

を消し、下庭の奥に設置されていたプールは校舎側に移され、プール跡はきれいに整備さ

れた。そして、校庭の横にあったプレハブ校舎は昭和四十六年に取り壊され、クリーム色

で覆われた鉄筋コンクリートの校舎は昭和五十九年に建て直され、校舎の中にあつたスロ

ープと共に思い出の中へ消えて行つた。

しかし、当時この学校には、暴れん坊だった僕のクッション的な存在が何人かはいたよ

うで、その中でも三、四年の担任だった近藤先生が一番のクッション的存在だった。

五月も半ばになった頃であつた。昼休みに職員室までどうぞ、という近藤先生からのお

誘いがあつた。僕のような問題児には足が進まない場所である。しかし、出頭命令が出て

はしょうがない、行ってやろうじゃないか・・・職員室のドアを開けた。

「うわっ！」

な、なんなんだ？ 僕に突き刺さりそうな先生たちの視線、先生全員が今にも飛び掛っ

てきそうな空気、しかも、担任の机がドア近くであればいいが、僕の担任のように奥だ

ったりするとたまったもんじゃないのだ。

近藤先生の前に立つと先生は僕の顔を見て笑顔を見せた。しかし、先生の奥側の隣には

宿敵鉄人28号が座っている。この男の先生は鼻のトンガリ具合と中途半端な二重目が鉄

人28号に似ていたためそう命名されたのだが、やたらと僕たちのクラスに顔を出し、悪

さをした生徒のケツを竹刀でたたくのだ。こないだもこの鉄人28号は僕とクラスの悪友

であるタカとアツの可愛いお尻を三発もやりやがった。

僕の推測では、近藤先生はやんちゃな連中が多いこのクラスに一生懸命取り組んでいた

先生であつたから、悩むことも多かったはずだ。そんな女心の隙間に入りこんで美しく独

身であつた近藤先生に気に入られようと「近藤先生、すべて僕にお任せください」とかな

んとか調子よくたぶらかして余計なことばかりする大変迷惑なやつなのだ。

僕はアツとタカの思いも込めて下唇を出したまま鉄人28号を睨みつけていた。

「島津くん……どこ見てんの？……」

「あつ、いや、あいつをいつか返り討ちに……」

「島津くん……返り討ちつて、誰かを返り討ちにする予定でもあるの？ いいかげんに

そついう下品なことはやめましょうね」

「そうはいかねえんだからしょうがねえじゃ、俺だけの問題じゃねえんだから……」

僕は鉄人28号の背中を睨みつけた。

「そうそう、返り討ちつていえば、最近、小耳に挟んだんだけど、島津くんたち、アメリ

カンスクールの生徒と仲が悪いそうね、顔がきれいだから喧嘩はしてないようだけど……」

「先生さあ……顔がきれいなのは俺たちのほうが強いって証拠じ

や、それより、誰がそ

んなこと言っただよ……どうせ……あいつか、お母ちゃんだ
ろうけど……」

「誰でもいいでしょ……それよりその、じゃ、じゃ、じゃ、俺よ
お、俺よおって言葉づ

かいどうにかならないの？ 横浜の言葉だろうけど、自分のことは
僕とか、せめて女の子

のように、なんとかじゃーんとか、そうじゃーんとかならないの・
」

「ぼくーってなんだよ、そんな女みてえにできる訳ねえじゃ……
」

「……とにかく、もう少し上品な言葉を使うこと、そ
れと、アメリカンスク

ールの生徒には近づかないこと、いいわね……」

「先生さあ、それだけ？ そんなことで俺を呼んだのかよ……」

「もちろんそんなことで来てもらったわけじゃないわよ。でも、島
津くんと話していると気

になることばかりで……そしたら本題につつまね。明日の
土曜日の午後なんだけ

ど、もし、お母さんの都合がよかつたら、お家におじやましてお母さんにお話したいこと

があるのね・・・」

「えっ？ 先生また来んのかよ？ こないだも来たじゃ」

「あの時は家庭訪問でしょ、今回は特別・・・」

「じゃあ、今度はなんで来んのよ、こないだことをお母ちゃんに言
いに行くのかよ？」

僕はそう言いながら鉄人28号を睨みつけた。

「えっ？ こないだのことって？」

近藤先生は驚いた顔を僕に向けた。

「なにつて、竹刀でやられたことだよ」

僕は鉄人28号に向かって顎を振った。すると、鉄人28号が目
線を送って来た。負け

じと下唇を出して睨み返すと、鉄人28号はにやりとして不気味な
笑みを返してくるでは

ないか、僕は身震いがした。

「そうじゃないわよ。そんなこと話したらお母さん心配して学校ま
で来ちゃっわよ」

先生はそう言って笑うと、僕の疑い深い顔を覗き込んできた。

「まったくだよ。なんでああやって何かあると学校にくるのかなあ、俺、まいっちゃうよ」

「いいお母さんじゃないのお、それだけ島津くんのこと心配してんだから・・・そうそう、

お母さんねえ、島津くんが三年生の時、島津くんを文学青年にしたって、いや、したか

ったかな？ そう言ってたことがあったのよ」

近藤先生がそう言ったとたん、鉄人28号が「プッ」と吹き出し、口を押さえながら笑うのをこらえ

ていた。というより完全に目は笑っている。僕には文学青年というものがどのような人種

なのか理解できなかったが、鉄人28号が失礼なやつだということ は理解できた。

「なに、笑ってんだよお・・・」

僕がそう呟くように言って鉄人28号を睨みつけると、鉄人28号は近藤先生に気づか

れないように静かに両手を合わせて謝るような仕種をしたが顔は笑っている。そんなこと

より文学青年という人種のことを気になり先生に尋ねてみた。

「先生……文学青年ってどんなやつよ」

「そうねえ……文学青年ねえ……たとえば本をたくさん読んだり……あつ、そうそ

う、ここに居るじゃない、文学青年だった先生が……」

近藤先生は何を血迷ったか僕に向けていた椅子から振り返ると鉄人28号を指で差した。

「冗談じゃない！ 僕は鉄人28号を下目使いで睨んでやった。すると、鉄人28号は人

指し指で自分の顔をつつつくように差しながら嬉しそうに頷いている。まったくどうしよ

うもないやつである。僕は鉄人28号を睨みながら言った。

「冗談じゃねえよ、俺はいやだねえ、そんなのになるのは……でも俺だって本ぐらい読ん

でるよ」

近藤先生はびっくりした顔をして。

「へえ、そうだったんだあ、それで島津くんはどんな本をよんでるのぉ？」

僕は自慢げに答えた。

「少年マガジンにサンデーってとこかな、キングもあったな」

すると、鉄人28号は音を立てずに大きな動作でゆっくりと手を叩き、僕を横目で見な

がら声を出さずに笑っていた。

「笑ってんじゃ、ねえよ、まったくよお・・・」

僕は声のトーンを上げ鉄人28号を睨みつけた。すると、近藤先生は周りにを気にしな

がら言った。

「島津くん・・・さつきから落ち着かないようだけど、何か気になるの？」

そう言いながら近藤先生は鉄人28号の方に頭だけ振り返った。近藤先生と目が合って

しまった鉄人28号は、目を見開くとあわてて自分の顔の前で手の平を大きく振った。

僕は鉄人28号を睨みながら考えていた。どうして僕の周りにはこういう大人どもが

多いのだろうか・・・

結局、先生は母に話したいという内容をはっきりとは口にせず、楽しみにしててねえ、

という気になる言葉を残すだけだった。だが、先生の様子からしてそれほど悪い話しでは

なさそうである。そんなことよりも昼休みの残り時間が気になっていた。

学校から家に帰ると珍しいことに人影がなく、唯一、おかえり、と僕を迎えてくれたの

は猫の軍団だけだった。

事務所を抜けて台所の右側の階段を勢いよく駆け上がっていくと「おう、おかえり！」と、洋服職人の

横山さんと佐々木さんの声が威勢よく返ってきた。

誰もいないうえにやっかいな二人が、しかも二人きりでいる。このおじさんたちは僕の

顔を見るとろくなことを言わない、しかも父が加わったりしたらその場から逃げ出したく

なる。まあ、我が家の三ばかトリオといったところだ。母から言わ

せれば僕も含めて四ば

かトリオらしいが。

横山さんの通称は横さん、四十歳台で奥さんもこの職場で手伝い
をしている。佐々木さ

んは二十歳台の独身で通称はささちゃんである。そのほかにも三、
四人の職人さんが出入

りしていたのだ。

この職場で縫われている洋服は男性用のスーツがおもで、室内の
真ん中には縦3 m、横

1・5 mほどの裁断用の台がテーブルの如く置かれ、鉄のかたまり
のようなアイロンが幾

つも並べられ、天井からはスチーム用のポンプが何箇所かにぶる下
がっていた。そして、

壁際には黒い大砲のようなミシン台が五台ほど並び、所々に頭と足
のないマネキンが型紙

に包まれて立っていた。

僕は階段横の畳部屋にランドセルをほっぱり投げながら「おかあ
ちゃんは？」と二人に

声をかけた。すると、顔中を覆っている無精ひげをなでながら横さ

んがにやつきながら言

った。

「エフ坊・・・明日、担任の先生が来るんだってなあ・・・」

僕は横さんが知っていることにびっくりしたが、それをすっかり忘れていた自分にもび

っくりしていた。

「そんなこと、なあって知ってたんだよお？」

恐る恐る横さんの顔を見ると、横さんは仕事台の上に広げた生地にハサミを入れながら

言った。

「さつきよお、先生から電話があつたらしくてな、おかみさん、また、エフちゃんがない

かしでかしたみたい、って言ってな、怒って家を出て行っちゃってよ、あの様子だともう

帰ってこないかもな」

「おかみさん、家出しちゃったりしてね」

そう言ってささちゃんはミシンを踏みながら笑っている。

「ええ、家出？ お母ちゃんがなくなったら、お父ちゃんが怒るじゃ」

「そうかなあ、社長はもてるからなあ、心配しなくてもすぐに新しいお母さんが来たりし

てね」

ささちゃんは顔だけ僕に向けながらにやりとした。

「・・・・・・・・」

僕は黙って爪を噛みながらささちゃんのとんがった顔を見ていると。

「それよりさあ、エフ坊は退学になちゃったりしてね、ねえ横さん・
」

「ささちゃん、退学ってなによ？」

僕が聞き返すと、ささちゃんはこう言った。

「退学ってね、学校側からもう学校に來なくていいよって言われることだよ。でもね、自

分からもう学校へは行きませんって言える自主退学っていうのもあるんだよ」

それを聞いた僕は意味もわからずうれしくなった。

「ささちゃん、そうなれば勉強しなくていいんだ？」

「ん、まあ、そういうことになるのかな」

「じゃあ、そのほうがいいじゃ」

「けどよお、エフ坊、残念だが義務教育の小学生じゃそれはねえかもな」

横さんは握っていたでかいハサミを向けながらすっかりすること
を言った。

「なあんでえ、退学にはなんねえのか、ささちゃん、嘘ばっか言う
んじゃないよ、期待し

てそんしたじゃ」

僕は退学の意味もわからないまま階段を駆け下りて行った。そし
て、事務所のソファ―

にどかつと腰をおろし横山、佐々木両氏が言っていたことを考えて
いた。

おじさんたちがいつも僕のことをからかうのはよくわかってるつ
もりだ。だが、どこま

でが本当で嘘なのか理解しにくいのである。

退学かあ・・・退学てえのになれば勉強をしなくていいのかあ・・・
でもなあ、義務な

んとかだからそれはむりだって言ってたよなあ・・・そんなじゃ、退学ちゅうのになるには

どうしたらいいんだあ・・・

それはそうと、お母ちゃんは何処に行ってしまったのだろう。もしかしたらあのお母ち

やんのことだ、学校に出向いて行って今頃近藤先生の話を聞いているのかもしれない。そ

して、話を聞いた後にがっかりして、本当に家には帰らず新しいお母ちゃんが来てしまう

のだろうか。いや、そんなことはない、近藤先生は悪い話しではないと言っていた。いや

待てよ、あの時、鉄人28号に気を取られていた僕の心の中に疑問が渦巻いた。本当にそ

う言っていたけえ・・・？ よく判らなくなり頭をかきむしった。すると、膝に乗っ

た猫が逃げるように膝の上から飛び降り、僕の足元で尻を向けたままじっとしていた。今

だ！ 尻尾をあげ大きなたまを人指し指でぶるん、ぶるんと揺すった。なんだか気分

がすつきりした。

その時、玄関の引き戸がガラガラと音をたてた。帰ってきた母の姿をみて少しほっと

していた。

「お母ちゃん、何処行つてたんだよお！」

僕は怒鳴った。

「お使いよ、ほら、近藤先生この中華菓子好きでしょう」

母は呑気な顔でそう言つと、小脇に抱えていた中華菓子の折り詰め箱を玄関から僕に見

せた。すると「あっ！」と思い出したように顔色を変え玄関から飛び込むように僕の前に

しゃがみこんだ。

「エフちゃん、先生からあなたのことで相談があるって電話があったわよ。くわしいこと

はその時についていうから、正直にいいなさい、何をしたのお、また喧嘩、なんなのいった

い何をしたのお？」

母は不安そうな顔でまくし立て僕の両膝に手を置くと顔を覗き込

んできた。

「俺はなにもしてねえよ!」

「悪いことばかりしてると、もう学校へ来なくていいって言われちゃうのよ」

「お母ちゃん、俺知ってるよ。それ、退学ってことだろ。退学になるとさあ、もう勉強は

しなくていいらしいじゃ、だから俺は退学を一回ぐらいやってもいいかなあって思ってたん

じゃ、けど、義務なんかでむりらしいじゃ、まったく残念だよ」

僕はさきほど仕入れたネタをここぞとばかりに言い放った。

「はなたは・・・なにばかなことばかり言ってたんの、意味が判って言ってたんの？ 誰がそ

んなこと教えたの、お父さん、それともおじさんたち？」

「そんなの誰だっていいじゃ、内緒だよ、それよりさあ、確か近藤先生は悪いことじゃな

いから楽しみにしててねえって言ってたんだから、心配すんなって」

僕はそう言って母の肩を叩いた。

「本当にそう言っていたのお、あなたの言うことはあてにならないんだから」

「本当だつてえ、明日になればわかるんだから、それに退学ちゅうのがやれんかもしれないな」

いし」

「なにが、退学ですか・・・もう・・・」

母はため息をつくと立ち上がり二階へと走りだした。

やつ、べえ・・・僕は玄関から外へ逃げだした。

そして、翌日の午後、近藤先生は約束通りに我が家へやってきた。

先生の話しは、僕が猫のことについて書いた作文のことであつた。我が家は猫屋敷で少

ない時で十匹、多い時にはのらもあわせると三十匹ぐらいいたこともあつたから、猫の観

察にはもってこいの家であつたのだ。

しかも先生はその作文を新聞掲載に推薦したいと言ってくれたそうだ。

この話を聞いて天と地がひっくり返ったのは僕よりも母の方だったに違いない。先生

には申し訳ないがその頃の僕には作文がどうなるうがどうでもよかったし、興味も示さな

かったようだ。

その後、候補は何点があったようだが、近藤先生の推薦とがんばりのおかげで作文はめ

でたく新聞に掲載されたのだ。母の脳裏には諦めかけていた文学青年の文字が再び浮き上

がってきたようだが、母の喜びと期待もみるみるうちにしぼんでいくのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1976d/>

チャンドラ - 中華街の星たち -

2010年10月15日20時45分発行